吉田彌平編

文國範師

第一部

五卷

42593
教科書文庫
4
810
51-1926
2000301852

資
教科書文庫
4
810
51-1926
2000301852

375.9
Y019

文部省檢定濟

大正十五年三月十七日　師範學校國語科教科用

吉田彌平編

師範國文

第一部用

卷五

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000301852

師範國文 第一部用 卷五

目次

一 太陽の言葉……島崎藤村 一
二 求め得る日……阿部次郎 七
三 花見……佐々醒雪 九
四 千劍破城の軍〔太平記〕 三
五 愛兒の記念……藤岡作太郎 三五
六 夜叉王……岡本綺堂 四五
七 月の東大寺……薄田泣菫 五八
八 京の喧嘩……十返舍一九 六三

廣島大學圖書印

廣島大學 教 44861 圖書

九　隱岐御遷幸……〔太平記〕　七
一〇　鷲……土井晩翠　九
一一　新しい詩の生誕……高須芳次郎　八
一二　北條泰時論……北畠親房　六
一三　舊師に懷を述ぶ……賴山陽　一〇
一四　賴山陽……朝比奈知泉　一七
一五　夏の海……堀口大學　一九
一六　或日の大石内藏助……芥川龍之介　二三
一七　東路の旅……〔東關紀行〕　二五
一八　月雪花……芳賀矢一　二七

廣島大學圖書之印

師範國文　第一部用　卷五

島崎藤村
名は春樹
小說家
詩人
明治九年長野縣
木曾生

一　太陽の言葉

島崎藤村

「お早う。」

と、わたしは太陽の隱れて居る處へ行つて聲を掛けて見た。返事がない。今日も太陽は引込みきりだ。

少しばかり自分の記憶にあることを書きつけよう。始めて太陽の美しさが私の眼に映つたのは、日の出の時では無くて、寧ろ日沒の時であつた。わたしはまだ十八歳の少年であつた。當時のわたしの周圍にはごく漠然とした自然の愛を敎へてくれ

品川御殿山
東京市の南郊

ほんとに太陽の美しさ又夜や月の美しさを眺めさせるこゝほんとの詩が生れて来る

藤村はやはり人の苦しみの中で他の人がするやうな支離き悲觀きせず又やすはきなかすぐとるの苦しみの中でこつ〳〵こゝろへてゐるの苦しみの中にも大を見出さうとしてこゝから藤村の勢術なり人格なるが生れて来るのであつた。

る者はあつても、一語あの太陽を見よとわたしに指して言つてくれる者は無かつた。わたしは沈んで行く夕日を品川御殿山の木立の間に見つけて、その驚と歡とを分つために、いつしよに山遊に出掛けた友達の方へ走つたくらゐである。わたしは友達と二人で美しい日沒を望みながら、しばらく其處に立ち盡したが、あの時の私の胸に滿ちて來た驚と歡とは、未だに忘れられない。

それにもまして忘れ難いのは、始めてわたしの内部に太陽の登つて來たことを感づいた時だ。青年時代のわたしの生涯は艱難の連續で、ほと〳〵太陽の笑顔を仰ぐといふことも無しに、多くの暗い月日を過した。稀にわたしの眼に映るものはと言へば、何の溫かみも無く、何の生氣も無く、唯朝になれば東から出て、

人の心の中に夜が来るならば太陽の来て来る事はない。若人の心には何時か夜が来るまで夜が明けて太陽が昇つて来ればよいが大抵の人は夜が安眠性となり夜が續いても何時までも夜の来る時節は青年期の若い頃を初めの時節即ち七八才より三才まで夜の来る。

晩には西の空へ沈んで行く樣な、紅いしよんぼりとした日輪であつた。わたしが二十五歳の青年の時だ。わたしは仙臺の方へ寂しい旅をして、その時始めて自分の内部にも太陽の登つて來る時の有ることを知つた。日光の饑——此のわたしの要求はかなり強いものであつたと見えて、明けさうで明けない薄くらやみが續きに續いて行つたときには、わたしもひどくがつかりした。わたしは幾度か太陽を見失つたこともある。太陽を求める心すら時には薄らいだこともある。太陽はわたしから離れて行つて、唯々無意味な、悲しく痛ましげな顔附のものとばかり、わたしの眼に映つたこともある。けれども、一度自分の内部にも太陽の登つて來る時のあることを知つたわたしは、幾度となく夜明を待ちうける心に歸つて行つた。毎年五箇月もの、

信濃の山の上　長野縣北佐久郡小諸町
東京の郊外　大久保町西大久保
隅田川の岸　淺草區新片町
異鄕　佛蘭西國

長い冬の續く信濃の山の上からも、新開地らしい頃の東京の郊外の畠の間からも、日の出を町の空に望むに好い隅田川の岸からも、わたしは夜明を待ちつゞけた。それぱかりでなく、長い年月の間には、わたしも異鄕の旅人となつたことがあつて、紫色の泥から見まがふ遠い海の上からも、見るからに夢のやうに青い燐の光の流れる熱帶地方の波の間からも、それから又、石造の建物も、冷たい並木も、黑く萬物は皆凍り果てたやうな寒い異鄕の町の中からも、わたしは夜明を待ちつゞけた。そして遠い日の出を夢みながら、故國をさして歸つて來たこともあつた。わたしは三十年の餘も待つた。恐らく、わたしはこんな風にして、一生夜明を待ち暮すのかも知れない。併し誰でもが太陽であり得る。わたしたちの急務は、たゞ〳〵眼の前の太陽を追ひ

かけることではなくて、自分等の內部に高く太陽を揭げることだ。此の考は年と共に深く、わたしの小さな胸の中にも根を張つて來た。

今のわたしが想像する太陽とは、もう餘程の年齡のものだ。物心づいてからこのかた、わたしが覺えて居るだけでも、太陽の齡はことし五十三にもなる。そのわたしの知らない以前の齡を加へたら、あの太陽が何程の高齡であるとも、ちよつとそれを言つて見ることも出來ない。人が五十三もの年頃になれば衰へないものは、極稀だ。髮は年毎に白きを增し、齒も缺け、視力も衰へ、曾て紅かつた頰にも、古い岩壁の面のやうな皺を刻みつける。そこにも附着する苔のやうな皮膚の斑點をさへ留める。親しかつたものも次第に死んで行つて、思ひがけない病と、晩年の孤

獨とが、人を待つて居る。このわたしたちの力弱さに比べたら、太陽のことは想像も及ばない、絶間のないあの飛翔と、あの奮躍。夜毎の沒落は、やがてまた朝紅の輝にと進んで行くあの生氣。まことの老年の豐富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが、最も若いといふことには、わたしは心から驚かされる。

「お早う。」

と、またわたしは聲を掛けて見たが、返事がなかつた。しかし、わたしはこの年になつて、また自分の內部に甦つて來る太陽のあることを感づくところから見ると、どうやら夜明も遠くないやうな氣がする。（三人）

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教授
文學博士
明治十六年山形縣生

二　求め得る日

阿部次郎

自分のつまらぬことを知るものはつまらぬ者でなくなるか。——つまらぬ者でなくなる者は上品の人である。併し下品の者はつまらぬ者なることを知つて依然としてつまらぬ儘に止つてゐる。嚴密に言へば眞正に自覺せぬ者、眞正に碎かれざる者であらう。僕は上品中の下品に屬する。僕の心は未だ眞正に碎かれてゐない。眞正に碎かるゝ日の來る迄、僕はこの苦しい日夜を續けるのだ。

二三年前の夏、朝じめりする草を踏んで、高野の山を下つた。宿坊を出る時に、一ケ月の馴染を重ねた納所先生は柔かい白い餅に細かに篩つた、稍青味を帶びた黃粉をつけて、途中の用意にと

神谷　高野山から北へ一里不動坂を下りた處

持たせてくれた。山を下れば食料の必要なき僕も、人の好意を無にせぬ爲に有難く之を受取つて、稍持餘し氣味に風呂敷に包んで寺を出た。神谷の宿を出外れた岐路で、僕は自分の前を行く一人の乞食に追ひついた。僕は咄嗟の間にあの餅を乞食にくれて荷物を輕くしようと思ひついた。乞食は其のきたない顏に美しい笑を見せて、丁度ひもじくつて弱つてゐる所でしたと、幾度も〳〵禮を言つた。さうして僕が輕く挨拶して通り過ぎる後から繰返し〳〵嬉しさうに感謝の情をのべた。僕は人に物をやつてあんなに嬉しがられた事がない。人から禮を云はれてあんなに嬉しかつた事がない。僕は自分の餅をくれた動機を考へて恥かしくなつた。

僕は此の眞正に飢ゑた人を見て羨ましかつた。心の底から與へられた幸福を經驗する人を見て羨ましかつた。乞食は柔に白い餅の返禮として、眞正に求むる者の幸福を僕の眼の前に突きつけてくれた。此の迷へる生活から逃れて、むしろ彼の乞食になりたいと思ひながら、僕は重い心を抱いて山を下つた。三年後の今日もまだ僕は眞正に求むる者の幸福を知らずにゐる。僕は與へらるゝ日よりも寧ろ求め得る日を待ちかねてゐる。併し道草を食ふことの趣味に溺れたる者には、恐らく死ぬ迄も待ちかねる日は廻つて來ないであらう。（三太郎の日記）

三　花見

佐々醒雪

花見といふ遊樂が年中行事の一つとなつて、老幼男女貴賤貧富、

佐々醒雪
名は政一
國文學者
東京高等師範學校教授
文學博士
京都生
大正六年歿
年四十六

打連れて花下に遊ぶといふ風俗は、西洋にも支那にもない。全く日本獨得のことで、それがやがて日本趣味の一面を代表してゐるとも見られる。

蓋し世界に日本の櫻のやうなはでやかな花もなく、又日本人ほど花の好きな國民もない。支那の桃李は專ら詩人に喜ばれ、西洋の薔薇や草花は主として上流社會に弄ばれる。然るに日本では丁度和歌や發句や川柳が、裏店にも床屋にも行はれるやうに、花のたよりには丁稚小僧も浮かれる。日本は詩の國であり、花の國である。朝日に匂ふ山櫻のやうな大和心は、畢竟その間から生れて來たのである。とはいへ、

青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり。

と謠はれた奈良の新都にこそは、名にし負ふ八重櫻も追ひ〳〵に植ゑられた事であらうが、それにしても、山城の新京のやうに、

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。

といふほどの美しい都では無かつたであらう。

殊に花の名所として日本隨一の名ある吉野山にすら、奈良時代には、未だ櫻は一向なかつたらしい。吉野の歌は數へきれぬほど萬葉に見えてゐて、しかも唯山川の美しい景色、殊に吉野川の早瀨の岩を嚙む絶景を反復してゐるのみで、とんと櫻は歌つてゐない。日本が櫻の國となつたのは、蓋し平安遷都以後のことである。

世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心は長閑けからまし。

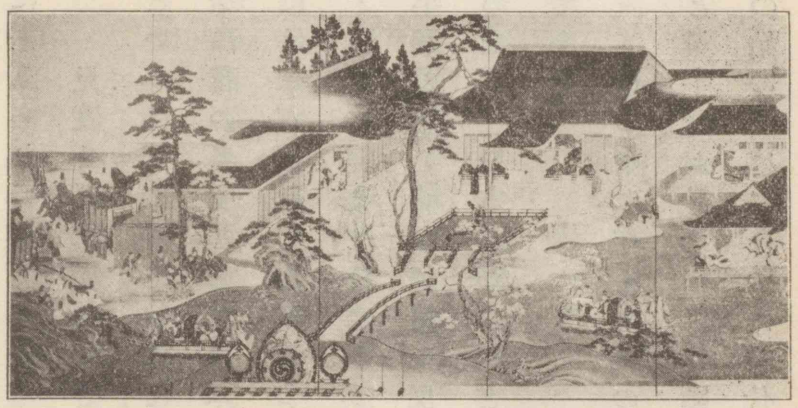
と業平卿が詠ぜられた頃、卽ち平安朝の初期が、花見といふ風俗の始めて盛になつた時代である。今日も櫻狩、明日も花見の宴

青丹よし　萬葉集にある小野老の歌

見渡せば　花ざかりに京を見やりて讃める素性（古今集）

いざ今日は
雲林院の皇子の
もとに花見に北
山のほとりにま
かけれりける時
によめる素性
（古今集）

いつまでか
春の歌とてよめ
る素性（古今集）



平安時代の花見（小堀鞆音筆）

と打續いた春の賑はしさ、なかなかに心のどかに暮す日もないといふのは、最もよく花時の盛況を偲ばしめる。

いざ今日は春の山邊にまじりなん暮れなばなげの花の蔭かは。

いつまでか野邊に心のあくがれん、花し散らずば千代も經ぬべし。

愛惜の心に牽かれて、暮るゝも知らず花の蔭に彷徨ふ樣を歌つた

後撰集
二十卷
村上天皇天曆五年（九五一）大中臣能宣等が勅を奉じて撰す
古今集の次に出た勅撰集

駒なめて
題不知讀人不知
（古今集）

花見にと
題不知道命法師
（後拾遺集）

歌は、眞に數を知らぬのである。まして咲くを待ち散るを惜しむ歌は、勅撰集の春の半ばを占めてゐる。かくて庭園は勿論、市街にも山々にも、年毎に櫻を栽ゑ、花を養つて、京は誠に花の都となつた。寛平の御時の櫻花の宴といふ名稱が、後撰集に始めて見えるが、その以後の王朝盛期には、あらゆる草子物語に花見といふ語の見えぬものはない位である。

駒なめていざ見に行かん故郷は、雪とのみこそ花は散るらめ。

花見にと人は山邊に入りはてゝ、春は都ぞ淋しかりける。

花見時に明巢狙ひが多いといふ、今の東京にも思ひくらべられる。

世の中を何嘆かまし櫻花、花見るほどの心なりせば。

世の中を
題不知紫式部
（後拾遺集）

吹く風を
吹く風をなこそ
の關と思へども
道もせにちる山
櫻かな

花や今宵の
行きくれて木の
下蔭を宿とせば
花や今宵のある
じならまし

歎きも悲みも、唯櫻にのみ慰められる大宮人の風流、これこそ源氏物語を生み出した紫式部の雅懷である。　されば一朝厭離の心を起して佛門に歸依しても、

花にそむ心はなどか殘りけん、棄て果てゝきと思ふ我が身に。

と西行法師は自ら怪しんでゐる。

花にそむ心は、出離の僧にも殘つてゐる。　されば又、「吹く風をなこその關。」と詠じた源義家や、「花や今宵の主ならまし。」と歌つた平忠度は、武士ながらも花を愛する心は忘れなかつた。　源平以後の戰亂の巷にも、例へば、平清盛には西八條の花見の宴がある。南北朝騷擾の間にも、田舍漢さへ花の下に集つて、酒飲み連歌すると兼好は記してゐる。　況や室町の小康に遭つて花見の盛ん

醍醐の花見

見てのみや
山の櫻を見てよ
める素性法師
（古今集）

であつたことは勿論で、かの闊達な太閤樣の醍醐の花見といふ、前後無比のお花見、大園遊會も開かれたのであつた。

花見風俗は平安朝も、鎌倉室町も、さして懸隔があつたことは見えぬ。時としては邸内の花見もあるが、まづは野山に出て、花の下に筵を設け辨當を開いて、終日遊樂淵醉に暮すのである。それも多くは主なき花であるので、

見てのみや人に語らん櫻花手ごとに折りて家づとにせん。

と歌はれたとほり、或は小さい枝を冠に頭插し、或は大きな枝を折つて歸ることもある。中古では、まだ生花の法もなく、床の間もなかつたが、それでも新渡の大きな花瓶などに枝を澤山に插しておいたり、その枝に歌をつけて、友人に贈つたりする。でも花を折ることを惜しんだ歌も、甚だ古い。

折りとらば
題不知讀人不知
（古今集）

一枝を
須磨寺の若木の櫻の制札の句辨慶の作といふ

守武千句
荒木田守武の俳諧千句をあつめたもの
天文九年（一五四〇）

折りとらば惜しやうな花よさよ
折りとらば惜しげにもあるか、櫻花、いざ宿かりて散るまで見よう。

は見ん。

とは古今集の風流である。されば兼好は、田舍者は醉の果に大きな枝を折取りなどすると呟いてゐる。狂言の「花折」は櫻を折られることを惜しんで、花見の客を禁じようとしてゐる。「一枝を折る者は一指を斬るべし。」といふ制札の傳說も、花折る者の多かつたことの傍證をなしてゐる。

近世德川期に入つては、久しき昇平につれて、花見は愈盛ではあるが、その初はなほ頗る殺風景なものであつた。

足利の末の「守武千句」には、錆槍を擔いだお伴を連れて、花見に出ることが見えてゐる、流石に戰國武士は、花見にも武備を忘れぬやうに思つてゐたが、德川期の泰平に入つても、

雄長老
京都建仁寺の僧狂歌をよくした
寛文
元年は二三二一
將軍德川家綱のころ

鬼貫
平泉氏
俳人
攝津伊丹生
元文三年（一七三八）
歿
年七十八

花見する供衆の放す鐵砲にあたらじとてや、歸る雁がね。

といふ雄長老の狂歌もあつて、寛文頃までは、小身者も花見といへば、態々槍持などを從へて出たものだとある。槍鐵砲も華美を競ふ一種の風俗と見える。但しその鐵砲は、いづれ野山を遊行するのであるから、或は小鳥獵を兼ねたものであらうか。王朝の初期には、鷹狩を兼ねた花見もあつたやうであるから、その遺風とも見れば見られぬでもない。ともあれ、武器を携へて威風堂々と練り出す花見は、今日から思へば少し異樣であるが、元祿の鬼貫が

何ごとぞ、花見る人の長刀。

と吟じたのは、なほ古武士風の花見扮裝が殘つてゐたのを捉へたものかとも思はれる。

丹前風
江戸神田の堀丹後守の邸前にあつた風呂屋の女から起つた風姿

貞享元祿
五代將軍徳川綱吉のころ

西鶴
井原西鶴
大阪の人
俳人小説家
元祿六年（一六九三）
歿
年五十三

元祿時代花見（長信筆）

ともあれ、かゝる風俗は久しいものでは無かつた。ほどなく御大身も草履取を從へたのみで、槍や鐵砲は、花の山には既に見られなくなつた。これに代つたものは、丹前風の寛闊扮裝、花見小袖の伊達模樣、男女ともに漸く華美を競うて、貞享・元祿の盛期には、花の姿も、衣裳の色にけおされるに至つたのである。

長持に春隱れ行く衣更へ。

とは西鶴が眼に映じた晩春である。

霞に落つる
五十首歌奉りし時寂蓮法師
暮れてゆく春のみなとは知られども霞に落つる宇治の柴舟（新古今集）

梅翁
西山宗因
俳人
天和二年（一六八二）
歿

吉野山
花の歌とて讀み侍りける西行法師（新古今集）

九十の春光盡きなんとして、華奢風流を極めた花見小袖が、長持に隱れるのが、やがて春の別れである。古の大宮人は、行く春を霞に落つる宇治の柴舟。に見送つたものだが、元祿の京・大阪の春は、花や霞では無かつたとのことである。

花筵見せばやと存じ候。

これは西鶴が師梅翁の名句である。花の山を一見せばやと云ふのは、足利時代に出來た能の脇僧である。梅翁が眼には、梢の花よりもその木蔭の、友禪・市松・千種染の入り亂れた小袖の花を、更に床しく感じたのである。

げに、元祿の花見は、既に風流人のみの花見ではない。

吉野山去年の栞の道かへて、まだ見ぬ方の花をたづねん。

と、道もない山蔭を辿つて、寂しい花を詠めるのは、既に昔の事で、

仕舞　囃子もなく裝束をつけず仕手一人袴を着けて舞ふ舞
土佐節　淨瑠璃の一派土佐の掾橘正勝はじめる
諸白　麹も米もよく搗き上げた上米でかもした酒
盧空藏　渡月橋を北へ渡つて三町ほどいつた處にある法輪寺

京に近き東山、祇園や清水の花蔭に、幕打廻らして、花毛氈を敷き、仕舞小謠の高雅なのと、土佐節三味線の仇めいたのと、とり〳〵の遊興、蒔繪の重箱に山海の珍味、風呂釜に諸白を煖めるといふ贅澤でなくては、お花見らしくは感じなくなつたのである。

思ひ起せば、自分の十代の頃には、近くは東山、遠くは嵐山に、男女打連れての花見といへば、先づ大風呂敷の辨當は小者に提げさせ、男達は一瓢を携へつゝ、ぞろ〳〵と朝早くから出かける。麥畠の間に、紫雲英・蒲公英の點綴する野路を辿つて、十町も行くところには、女達は着物の裾を擎げて蹴出あらはに、子供等と摘草を始める、男達ははや瓢簞の口を開く。雲雀や鶯に愈興を添へて、花の蔭に行きつくまでには、半ばは春色に醉心地である。殊に十三參りと云つて、嵯峨の虚空藏に、今歲十三になる子供を、心

太秦・御室　共に京都市の西郊
千劍破城　河内國南河内郡千早村にあつた金剛山の西麓
赤坂　同國同郡赤坂村千早の北一里

ゆくばかり着飾らせて、花見かた〳〵參詣させる。それを親子兄弟が伴ひ行くきらびやかな同勢が太秦・御室の邊を練り行く姿は、今もまざ〳〵と見える樣で、京染の華美を盡した友禪模樣、嫁入衣裳にしては派手過ぎる好みが、やがて十三參りの特色で、これが又元祿の花見姿をさながらに傳へたといふべきであつた。（醒雪遺稿）

四　千劍破城の軍

千劍破城の寄手は前の勢八十萬騎に又赤坂の勢馳せ加はつて百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は見物相撲の場の如く打圍んで、尺寸の地をも餘さず充ち滿ちたり。旌旗の風に飜

つて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて耀ける有樣は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく處には山勢これが爲に動き、鬨の聲を震ふ中には坤軸須臾に摧けたり。

この勢にも恐れずして、僅かに千人に足らぬ小勢にて、誰を憑み何時を待つとしもなき城中にこらへて防ぎ戰ひける楠木が心の程こそ不敵なれ。此の城、東西は谷深く切れて人の上るべき樣もなし。南北は金剛山につゞきて而も峯峙ちたり。されども高さ二町許にて、周り一里に足らぬ小城なれば、何程の事か有るべきと、寄手これを見侮つて、初め一兩日の程は向ひ陣をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊までかづきつれてぞ上りたりける。城中の者共少しもさわがず靜まり返

つて、高櫓の上より大石を投げ懸け〳〵楯の板を微塵に打碎いて、漂ふ處を差詰め〳〵射ける間、四方の坂よりころび落ち、落ち重なつて手を負ひ、死を致す者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衞門尉軍奉行にてありければ、手負・死人の實驗をしけるに、執筆十二人夜晝三日が間筆をも置かず注せり。さてこそ「今より後は、大將の御許しなくして合戰したらんずる輩をば、却て罪科に行はるべし。」と觸れられければ、軍勢暫く軍を止めて、先づ己が陣々をぞ構へける。

千劍破城附近圖

金澤貞將
大佛陸奥守直貞

兩大將
大佛高直
長崎高資

爰に赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州に向つて宣ひけるは、「前日赤坂の城を攻め落しつること、全く士卒の高名に非ず。城中の構をおし出して水を留めて候ひしに依つて、敵程なく降參仕り候ひき。是を以て此の城を見候に、是程僅かなる山の嶺に用水あるべしとも覺え候はず。又揚げ水なんどをよその山より懸くべき便も候はぬに、城中に水澤山に有りげに見ゆるは、如何樣東の山の麓に流れたる溪水を夜々に汲むかと覺えて候。あはれ宗徒の人々一兩人に仰せ附けられて、この水を汲ませぬ樣に御計ひ候へかし。」と申されければ、兩大將「此の義然るべしと覺え候。」とて、名越越前守を大將として、その勢三千餘騎をさし分けて水の邊に陣を取らせ、城より人おり下りぬべき道々に逆茂木を引きてぞ待ち懸けゝる。

楠木は元來勇氣・智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を拵へける始め、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水この峯にあつて、滴ること一夜に五斛許なり、この水いかなる旱にもひる事なければ、形の如く人の口中を濡さんこと相違あるまじけれども、合戰の最中は或は火矢を消さん爲、又喉の乾くこと繁ければ、此の水ばかりにては不足なるべしとて、大きなる木を以て水船を二三百打たせて水を湛へ置きたり。又數百箇所作り雙べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨ふれば霤を少しも餘さず舟にうけ入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける。この水を以て、縱ひ五六十日雨降らずともこらへつべし、其の中に又などかは雨降ること無からんと、料簡したる智慮の程こそ淺からね。

されば城よりは強ちに此の谷水を汲まんともせざりけるを、水防ぎける兵ども夜毎に機をつめて、今や〳〵と待ち懸けゝるが、初めの程こそあれ、後には次第々々に心懈り、機緩みて、「此の水を汲まざりけるぞ。」とて、用心の體少し無沙汰にぞなりにける。楠木是を見すまして、究竟の射手を揃へて、二三百人夜に紛れて城よりおろし、まだ東雲の明けはてぬ霞隱れより押寄せ、水邊に詰めて居たる者共二十餘人切り伏せて、透間もなく切つて懸りける間、名越越前守こらへ兼ねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合はせんとひしめけども、谷を隔て尾を隔てたる道なれば、輒く馳せあはする兵もなし。とかくしける其の間に、捨置きたる旗・大幕なんど取持たせて、楠木が勢徐かに城中へぞ引き入りける。其の翌日、城の追手に三本唐笠の

紋書きたる旗と同じき紋の幕とを引いて、「是こそ名越殿より賜はつて候ひつる御旗にて候へ。御紋付いて候間、他人の爲には無用に候。御中の人々是へ御入り候ひて召され候へかし。」と云つて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士ども是を見て、「あはれ名越殿の不覺や。」と、口々に云はぬ者こそ無かりけれ。

三本唐笠の紋

名越一家の人々、此の事を聞いて安からぬ事に思はれければ、「當手の軍勢共一人も殘らず城の木戸を枕にして討死をせよ。」とぞ下知せられける。是に依つてかの手の兵五千餘人思ひ切つて、討てども射れども用ひず、乘越え〳〵城の逆茂木一重引破つて、切岸の下までぞ攻めたりける。されども、岸高うして切立つたれば、やたけに思へ

どものぼり得ず、たゞ徒に城を睨み忿を抑へて息つき居たり。此の時城の中より、切岸の上に横たへ置きたる大木十許切つて落し懸けたりける間、將棊倒しをするが如く、寄手四五百人壓に討たれて死しにけり。これにちがはんとしどろに成つて騒ぐ處を、十方の櫓よりさし落し、思ふざまに射ける間、五千餘人の兵共殘少なに討たれて、其の日の軍は果てにける。誠に志の程は猛けれども、唯仕出でたる事もなくて若干討たれにければ「あはれ恥の上の損かな。」と、諸人の口遊はなほ止まず。世の常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮りにくゝや思ひけん、今は初めのやうに勇み進んで攻めんとする者もなかりけり。

長崎四郎左衞門尉此の有樣を見て、「此の城を力攻にする事は人を討たるゝばかりにて、其の功成り難し。唯取卷いて食攻にせ

花の下 連歌に秀でたるものゝ稱

百服茶 茶會の一種 茶を品評し賭物をして勝負を決する

よ。」と下知して、軍を止められければ、徒然に皆堪へ兼ねて、花の下の連歌師どもを呼び下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける。其の初日の發句をば長崎九郎左衞門尉師宗、

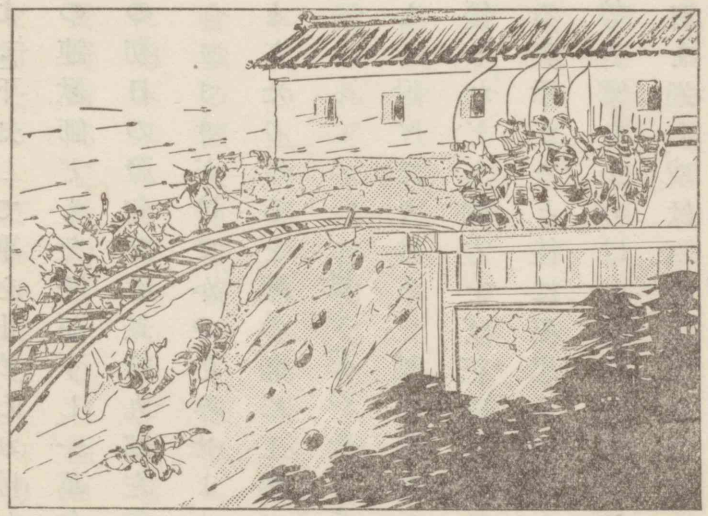
さきがけてかつ色みせよ、山櫻、

としたりけるを、脇の句に工藤二郎左衞門尉、

嵐や花のかたきなるらん。

とぞ附けたりける。誠に兩句ともに詞の緣巧にして、句の體は優なれども、御方をば花になし、敵を嵐に喩へけるは、禁忌なりける表示かなと、後にぞ思ひ知られける。大將の下知に隨つて軍勢皆軍を止めければ、慰む方や無かりけん、或は碁・雙六を打つて日を過し、或は百服茶、褒貶の歌合なんどを翫んで夜を明かす。是にぞ城中の兵はなか〳〵惱まされたる心地して、遣る方も無

かりける。



疊楯　のべたゝみの自在な楯

少し程經て後、正成「いでさらば又寄手をたばかりて居眠さまさん。」とて、藁を以て人長に人形を二三十作つて、甲冑を着せ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前へ疊楯をつき雙べ、其の後ろにすのぐりたる兵卒百人を交へて、夜のほの〴〵と明けゝる霧の下より、同時に鬨をどつと作る。四方の寄手鬨の聲を

聞いて「すはや城の中より打出でたるは。今こそ敵の運の盡くる所の死狂ひよ。」とて、我先にとぞ攻め合せける。城の兵はかねて巧みたる事なれば、矢軍ちとする樣にして、大勢相近づけば、人形ばかりを木隱れに殘し置いて、兵は皆次第々々に城の上に引きのぼる。寄手、人形を實の兵ぞと心得て、是を擊たんと相集る。正成所存の如く敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつと發す。一所に集つたる敵三百餘人、矢庭に打殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。軍果てゝ之を見れば、あつぱれ大剛の者かなと覺えて一足も引かざりつる兵、皆人にはあらで、藁にて作れる人形なり。之を討たんと相集つて、石に打たれ矢に當つて死せるも高名ならず、又之を危みて進み得ざりつるも、臆病の程顯れていふ甲斐なし。唯とにもかくにも萬人の物笑とぞな

りにける。是より後は彌〻合戰を止めける間、諸國の軍勢唯徒に城を守り上げて居たるばかりにて、するわざ一つも無かりけり。爰に如何なる者か詠みたりけん、一首の古歌を飜案して、大將の前にぞ立てたりける。

古歌
よそにのみ見てやみなん葛城の高間の山の峯の白雲
（新古今集　讀人不知）

たかまの山のみねの楠の木。

同じき三月四日、關東より飛脚到來して、「軍を止めて徒に日を送ること然るべからず。」と下知せられければ、宗徒の大將たち評定有つて、御方の向ひ陣と敵の城との間に高く切り立てたる堀に橋を渡して、城へ討入らんとぞ巧まれける。之が爲に京都より番匠を五百餘人召し下し、五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘りに梯をぞ作らせける。梯既に作り出しけ

魯般が雲の梯
「楚欲レ攻レ宋、……墨子曰、臣見二大王之必傷レ義而不レ得レ宋、王曰、公輸天下之巧士、作二雲梯之械一、設以攻レ宋、曷爲弗レ取。」（淮南子）
公輸は魯般の號

れば、大縄を二三千筋つけて、車を以て卷き立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯も斯くやと覺えて巧なり。

軍兵たちは

軍兵たちはやりをの兵共五六千人、橋の上を渡り、我先にと進んだり。あはや此の城只今うち落されぬと見えたる處に、楠木豫て用意やしたりけん、投松明のさきに火を付けて、橋の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水彈きを以て油を瀧の流るゝやうにかけたる間、火橋桁に燃えついて、溪風焔を吹き布いたり。愁に渡りかゝりたる兵共、前に進まんとすれば、猛火盛に燃えて身を焦す。歸らんとすれば、後陣の大勢前の難儀をも云はず支へたり。そばへ飛びおりんとすれば、深く巖そびえて肝を冷し、如何せんと身を揉うで押しあふ程に、橋桁中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の兵、同時に猛火の中へ落ち重なつて一人も殘

八大地獄　等活地獄　黑繩地獄　衆合地獄　叫喚地獄　大叫喚地獄　焦熱地獄　大焦熱地獄　無間地獄

ら、ず燒け死にけり。其の有樣、偏に八大地獄の罪人の刀山劍樹につらぬかれ、猛火鐵湯に身を焦すらんも、斯くやと思ひ知られたり。

十津川　大和國吉野郡の南方山地　十津川の流域

宇陀　大和國宇陀郡

宇智郡　大和國の東部　大和國の西部で吉野川の兩岸

さる程に吉野・十津川・宇陀・宇智郡の野武士共、大塔宮の命を含んで相集る事七千餘人、こゝの峯かしこの谷に立隱れて、千劍破の寄手共の路を差塞ぐ。これに依つて諸國の兵の兵粮忽ちに盡きて、人馬共に疲れければ、轉漕に怠へ兼ねて、百騎二百騎引いて歸る處を案內者の野武士ども處々のつまり〳〵に待ちうけて討留めける間、日々夜々に討たるゝもの數を知らず。希有にして命ばかりを助かる物は、馬物具を捨て、衣裳を剝ぎ取られて裸なれば、或は破れたる簑を身に纏ひて膚ばかりを隱し、或は草の葉を腰に卷いて恥をあらはせる落人共、每日引きも切らず十方に逃散る。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士共の重代したる物具・太刀・刀は、皆此の時に至つて失せにけり。軍勢ども親討たるれば子は髻を切つてうせ、主疵を被れば郎從助けて引きかへす間、始は八十萬騎と聞えしかども今は纔かに十萬餘騎になりにけり。（太平記）

藤岡作太郎　國文學者　東京帝國大學文科大學助教授　文學博士　明治四十三年歿　年四十一

本誓寺　東京市深川區仲大工町にある淨土宗京都知恩院の末寺

羅漢　梵語阿羅漢の略　Arhan　小乘の悟を得た者

菊池容齋　畫家　最も歷史畫に長じた　明治十一年歿　年九十一

平出君　平出鏗次郎　國文學者　文部編修　明治四十年歿

五　愛兒の記念

藤岡作太郎

早くも三四年を過ぎぬ、深川の本誓寺に詣でて五百羅漢の畫幅を見たる事ありき。菊池容齋の經營慘澹たる筆に成れる大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸列ねて供養し、普く有緣の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて步を運びしなり。容齋が揮

前賢古實
二十卷
菊池容齋畫
可美眞手命より
細川頼之に至るまで數百人の像を畫いたもの
今上陛下
明治天皇

福田行誠
淨土宗の高僧。東京芝增上寺に住し後深川本誓寺に隱居した後また推されて京都知恩院主となつた
明治二十一年寂
年八十三

毫の因緣については、あはれなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實は、この歷史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、また和氣淸麿に神號追贈あらせられしも、或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど、初はこの十年苦心の作も發行する書肆なく、上梓する資財なく、久しく筐底に祕めて徒に紙魚のすみかとなるを待つばかりなりしかば、福田行誠に向ひて

藤岡作太郎

堪へがたき遺憾の情を漏したりき。

時に、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人ありき。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。「婚禮のをり持參せる衣服・調度、今はこなたに置きても詮なし、たゞ歎きの種ぞ。」とて、婿の方より里方に返す。里方には受取らず、「一旦遣はしゝ女の道具は、卽ちそなたのもの、それを返さるゝは死したるものを離緣するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。これはそなたへ。」「いやこなたへ。」と押問答の果、金兵衛は腕拱きて、「さらば吾に思案あり、今深川におはする行誠上人は淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の緣ともなりぬべし。」といふに、乃ち相談は決し、

五百應眞
五百羅漢

かの調度を賣代なし、なほ首尾をあはせて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、「喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで嬉しく、有りがたく、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけり。容齋は「年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべき。」とたづぬるに、行誠は「善いかな。さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはゞ、亡者の爲、施

菊池容齋筆

主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の滿足より延いては世間の滿足もひとへに世を早うせし少女の爲、それを悲しむ父母のためなるを。」と示す。「それこそ吾にふさはしき業なれ。いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりに。」と、沐浴齋戒して書きあげたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折も、くさ〴〵の供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃愛兒を喪ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さしも心にも留らず、畫幅の由緒も一わたり聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかりなど思ふまゝの事を言散して、さて過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな。昨日は人の身の上、今日は我が身など古

ある時は
ある時はありのすさびににくかりしなくてぞ人はこひしかるべき（讀人不知）

めかしき言草ながら、今こそひし〳〵と心の底に染みぬれ。吾も一昨年の夏長女を失ひぬ。長女・名は光・時に七歳・笑ひさゞめき戯れしものゝ、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奥も測り知られたり。唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか、かくても過さば過さるゝことか。ある時はありのすさびに過してし、なくてぞまことの哀れさは知りぬる。よくもあしくも咲出でたる花の、手折らるゝはさてありぬべし。固き蕾の人の目にとまるともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかりぞや。年たけて少しにても世にあるかひの務をなしたらば知らず、やう〳〵物のあやめも覺ゆる程に、早くもとの闇路に歸り

なばかゝるものゝありしと知るは家の内の人ばかり。世にも知られで空しく來り、また往く、いかに悲しきことぞ。愚かなる親はせめても亡き兒の、わが心に、又人の心に忘れずば、それをしもなほ生きたりと喜ばん。固よりわが家のものゝ、生涯忘るべき筈もなし。唯忘れじとにはあらず、幼き罪なき兒はさま〴〵の教訓をその親、その祖母に遺したり。もし吾等の將來に得る所あらば、そは卽ちわが兒の賜ともいつきてん。さりとても現なの心や。過去りし面影と殘しゆきしこの教とを身にしめていまだ足らず。願はくは忘れんとするわが友の一人にても、我が兒を思ひ出でんことを。知らで止みなん世の人の一人にても、かゝるものもありしよと愍まんことを。これのみぞなき後の我が望なりける。

みどり兒　鶴松

愛妃　弘徽殿の女御子

豐太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは老いての後、やう〳〵儲けたりしみどり兒に死なれて鬱悶やる方なく、いかにしてか其の悲を忘れんとてなりと傳ふることのあるを、歴史家は「そは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻事なり。」といはん。　されど、凡人にもせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものを、當時の秀吉が胸のうちを思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず。　華山天皇は愛妃を先だてし御悲に堪へたまはざりしその機に乘じて、藤原道兼がそゝのかしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせたまひき。　後にぞ道兼が欺けるなりと知りて悔しく思召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔みたまひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善知識

亡き人のためにはよくこそ朕を誘ひけれと、逃去る道兼を見送りて、満足して御髪は下したまひけんかし。　おほけなき例を引き奉るにはあらねど、わが身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を顧みるなり。　健かなる者は日々の務に勵みて其の悲を忘るべし。　悟ある者はせん方なき世の習と、術無き思に沈まざるべし。　あはれ身も心も弱き者の奮ひ立ちて働き疲るゝ事もえせず、さりとて一筋に思ひ諦むることもならず、つく〳〵と日毎に同じ歎を繰返すかな。

永祿四年毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す。　家臣等、父母の愁傷いかばかり甚だしかるべきと、心配一方ならざりしに、案の外元就は悲痛の色なく、其の子吉川元春・小早川隆景及び家臣等を呼びて隆元の死亡は偏に尼子滅亡の基なり。　わが子の弔合

戰と思ひて皆々心を一つにして向はゞ、強敵もいかでか挫かざるべき。勝利は掌の中なり。隆元のためぞ、位牌の見てあるぞ。」と勢込んで言ひしかば上下愁眉を開いて勇み立つ。「之をしほに進めや。」とて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を拔きたりといふ。論ずる者はいふまでも無く、これ兵氣の沮喪するを憂へて人心を鼓舞せしなりといふめれど、それのみにては物足らず、天折せし愛子を悼みて、一勝一功も其の手に成りしと知らせばやとの親心ならじやは。勇ましき世の事は思ひもよらず、吾にははかなき筆あるのみ。南海の任に下りし時伴ひし人の、歸り上る時は一人足らずと歎きて書きし貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひめぐる人の心ばかりは同じかりけり。されど我が日記は同じ事を繰

白鹿
出雲國島根郡法吉村の白髮山に在つた尼子氏の城
松江市の北一里

一人足らず
都へと思ふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり
（紀貫之）
日記
土佐日記

返し繰返して、人に示すほどのものならず、何をがな世に公にして愛兒の記念とせんと思ひなりぬるも、筆執ることさへものうくてはか〳〵しくも心定めず。

かくて思ひ立ちぬるより三とせを閲して、やう〳〵に稿を了へたるが、この文學史なり。誇らはしく世に示さんこと江湖に對して、また亡兒に對して、恥かしくは思へど、今はたすべなし。同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。（國文學史講話）

岡本綺堂
名は敬二
戯曲家
明治五年東京生
登場人物
面作師夜叉王
夜叉王の娘　桂
同　楓
源左金吾頼家
下田五郎景安
修禪寺の僧
元久元年七月十八日（一八〇四）この日頼家は北條時政の手で弑せられた年二十三
修善寺村
今の田方郡修善寺村
建仁三年（一八〇三）八月源頼家母政子の爲にこゝに幽せられた

六　夜叉王

元久元年七月十八日
伊豆の國狩野の莊、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり、庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畠を隔てて、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(廿三歳)跡より下田五郎景安(十七八歳)頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰を掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經れども出來せず。幾度か延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　予は生れ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒

明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく、打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ、作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……其の申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　Yaksa　梵語　捷疾鬼

羅刹　Rāksasa　梵語　惡鬼

三島神社　伊豆國田方郡三島町にある　修禪寺から五里ほど北

夜叉　其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り男・女・天人・夜叉・羅刹ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く、彼に通ひて始めて面も作られまする。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵、夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらくりくらりと取止の無い事申上げたら御疳癖が愈〻募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と

御返事を申すがよからう。

夜叉　ぢやというて出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは、如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら、早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

狩癖募れる頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。のう父樣。

と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

頼家　えゝおのれ、前後不揃の事を申立てゝ予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、嘘いつはりではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

狐　ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それが可い、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言にて心少しく解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。

と飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。これ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝ。

夜叉王容を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は憚ながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふが如き怨靈・怪異なんどの類

……。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。あり難く御禮を申されい。

頼家　むゝ、とにかくにも、此の面は頼家の意に適うた。持歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

頭にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め。頼家に捧ぐ。頼家立つ。五郎も立つ。桂庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持ちて出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父様、お見送を……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜叉王起ち上つて、暫時默然として

ゐたりしが、やがてつか〳〵と縁に上り、細工場より槌を持來りて、

壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚

きて取縋る。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　せつば詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、

（劇）夜叉王

これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を殘さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。

夜叉　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思召さば、これから愈、精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は縋りて泣く。　夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。（日暮れて笛の音遠く聞ゆ。）

（綺堂戯曲集）

薄田泣菫
名は淳介
詩人
文學者
大阪毎日新聞記者
明治十年岡山縣生

東大寺
奈良の大佛のある寺

七　月の東大寺

薄田泣菫

月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すく〳〵と大樹の立ちこめた境内の木立には月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷つてゐる。このやうな宵に木立の下路で路惑ひで

密迹
密迹力士
東の方で快慶の作といふ

金剛
金剛力士
西の方で運慶の作といふ
何れも佛法守護の神

寶杵
金剛杵ともいふ
力士のもつ武器

劫
Kalpa
梵語
非常に永い時間

もするものならば、きつと鬼の落した蠱の係蹄にかゝつて、夜一夜歩きまはつたところで、いつかな路標を見つけることも出來なからうと思はれる。

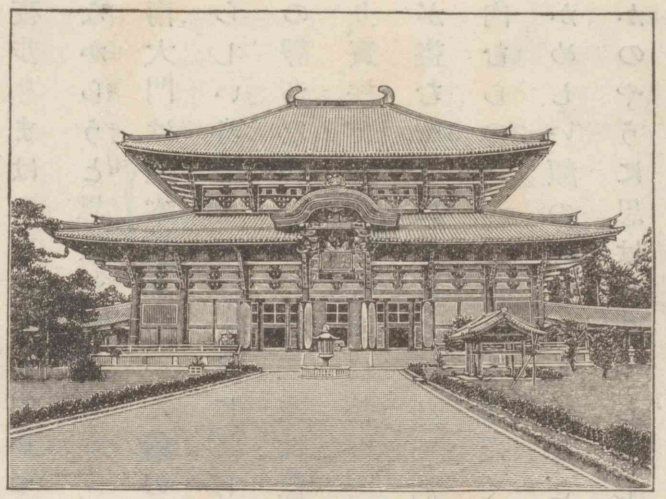
南大門は撞木杖をついた翁のやうに支柱にもたれて、そのすばらしい身軀をじつと空に擡げてゐる。密迹・金剛の二力士はこの靜かな宵にもその三丈に餘らうといふ體を起して胸肉を張り、寶杵を揮つて、張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月あかりが盜むやうに窓にこぼれて、肩より脹脛にかけて半身に流れる肉むらの色がいかにも冷たく又美しい。じつと見てゐるといかめしい顔のどこやらに、「夢ごこち」が漂うて靜かに吐息をつくかのやうに思はれる。しかしそれもほんの一瞬の間で、あわただしくも再び劫初このかた寶杵を揮つて教法を護つてゐる金

東大寺南大門の金剛力士

二天
毘沙門天
持國天

金堂
寺の中心にある
堂

剛神の居丈高な姿になつてしまふ。



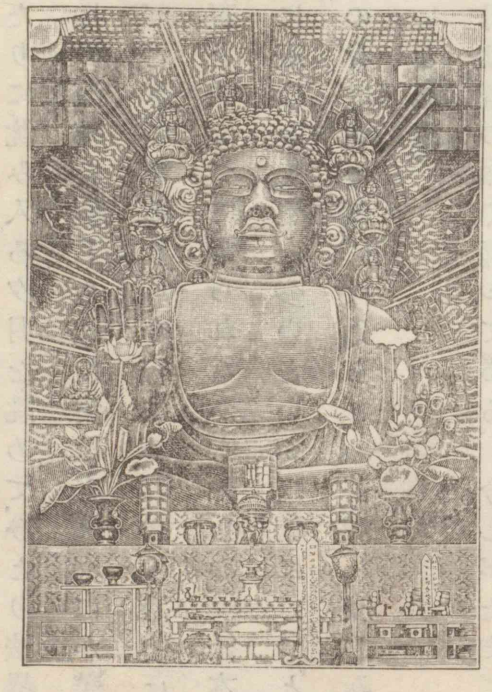
東大寺

佛殿の中門は閉されてゐる。こゝにも月明りはしつとりと二天の木像に濕つてゐる。百間にもとゞかうといふ廻廊は鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこやらにさやくやうな聲ひゞきがして、それもやがて消えてしまふ。と、

毘盧舍那
梵語光明遍照と譯す大日如來
Vairocana

永祿
永祿十三年(一三七〇)十月十日松永久秀の亂で炎上今の大佛殿は元祿に再建

あたりはもとの靜寂になる。天人の足音も聞えさうな宵である。この樣な靜かな夜をじつと佛殿の闇に閉ぢ籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。



東大寺大佛

永祿の昔、佛殿が炎上してより後、百三十餘りの夏冬は、佛はいつも露佛でいらせられたといふ。その頃は夢のやうな月夜の靜かさに醉ごこちになるまでも見とれられてゐられたであらう。どことも知らず十六夜薔薇のにほふ卯月の宵に、

佐保　小さな川　春日山から出て東口の北を西へ流れ南に轉じて秋篠川と合し末は大和川に入る

秋篠　奈良縣生駒郡平城村秋篠　奈良市の西一里

閻浮　梵語 Fambu-dvipa　勝金洲と譯す　須彌山の南にある國々のことといふ　印度　今は廣くこの世界の意に用ひる

春日野の木立より漏れるながしめのやうな月明りに濡れながら、または佐保の川瀨に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る夕月を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀じられた姿は、どれ程にか美しく又偉大なるものでござつたらう。今宵はそれらの追懷にしみ〴〵と寂しみの盃を味はつてゐられるかも知らぬ。喬木は背丈の高いがゆゑに寂しみもまた多いといふ。世に二つとない偉大な毘盧舍那の身は、また他には知られぬ甚深な寂しみを抱かるゝに相違ないと思ふ。

月は魔の如く踊つてゐる。今しがたまで折々水遊びの音をたてゝゐた魚は靜まりかへつて、鏡が池に波は寢てしまつた。松の葉一つこぼれる音がせぬ。

十返舍一九　本名畠田貞一　江戸の戯作者　天保二年(一八三一)歿年五十七

御門前　京都方廣寺の御門前

百年も經つたか知らぬ。ふと頭の上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた都跡の宵はもう夜半過の心もちがする。(落葉)

八　京の喧嘩

十返舍一九

これよりこの御門前を北へさして行くに、往來殊に賑はしく、げにも都の風俗は男女ともにどことなく柔和溫順にして、馬子・歩荷持までも、洗濯布子の糊こはきを折目高に着なして、あのおしやんすことわいなと、なまめきたるもをかしく、二人は輿に乘じ、目に見るものごとに珍しくたどり行くうち、俄かに往來騷ぎ立ちて、老若打交り走り行く人ごとに、

「ほうほ、よい〳〵、えつこらさつさ。ほうほ、よい〳〵、えつこらさつさ。」

彌次郎兵衛「むしやうに人が駈けるは何だ。いや向ふに何かあるさうで凄まじい人だ。もし〳〵、何でございやすね。」

向ふより來る人「あこにえらい喧嘩があるわいの。」

北八「京の喧嘩、珍しからう。」と足早に行きて見るに、見物山の如く、往來もならぬ位なるに、二人は押分け〳〵てこれを見れば、この喧嘩の一人、魚屋と見えてそこに盤臺などおろしてあり、相手は職人體の男、何れも屈竟の若者なり。されど都は人の心も悠長にして、喧嘩と見ゆれど、さのみ頭から叩きあひもせず、日當りのよき處に二人向ひ合ひて、

魚屋「これいの、わが身の方から行當りくさつて、そないな事いふもんぢやない。おのれ天窓打いてこまそかい。」

相手職人「置きくされ。こなんが手の動くのに、こちやじつとしてゐやせんわい。」といひつゝ手拭を丁寧に折りて、鉢卷をする。

魚屋「よう願ならすわろぢやな。一體わりやどこのもんぢやい。」

職人「おれかい、おりや堀川姉が小路下る所ぢやわい。」

魚屋「名は何といふぞい。」

職人「喜兵衛といふわい。」

魚屋「年はいくつぢや。」

職人「二十四ぢやわい。」

魚屋「おきくされ。おのれ二十四にしちやえらい若い。うそつきくさるな。」

職人「何いふぞい、ほんまぢやわい。前厄でことし鼻めを死なした

わい。」

魚屋「そりや、えらい力落しあつたぢやあろ。えいきみさらしたな。」

職人「いや、そればかりぢやない。乳のみくさる餓鬼めがあるさかい、えらい難儀な目にあうたわい。」

魚屋「そぢやあろわい。おりやわれに二つ上ぢやわい。」

職人「さうぬかしくさりやわれも若い。うちはどこぢやぞい。」

魚屋「一條猪熊通東入る所ぢやわい。」

職人「かいやい、あこに盲目で目の見えん寸伯といふ針醫があろがな。」

魚屋「おゝ、針醫がありやどうすりや。」

職人「いや、こちの一家ぢやさかい、おのれ通りくさるなら言傳してこまそ。」

魚屋「いやぢやわい。何のわれが言傳、誰がいほぞい、えらい阿房めぢやな。」

見物の人欠伸しながら、

十兵衛「待たんせ、今に打合ふぢやろ。」

見物「いや、わしや内に客ほつておいて來たさかい。」

十兵衛「そしたら其のお客つれてごんせ。序にうすべりなと一枚くさんせんかい。」

又こちらの方にゐる見物、軒の下につくばひ、髯を拔きく、

見物「見なされ、あつちやの童がどうしても偉い奴ぢやわいな。」

見物「いや、こつちやの男もえらい顔ぢやわい。」

見物「ほんに、その顔で思ひ出した。お家はどうぢやいな。痛所は

えいかな。」

見物「おかたじけなうござります。とんとよいやうであつたが、昨日からえらうわるなつて、ついゆうべ死にましたわいな。」

見物。そりや、おまへ御愁傷ぢやあろ。御葬禮いつぢやいな。」

見物「今出しますとこぢやあつたが、偉い喧嘩があると人が走るさかい、わしもついて見て戻るほどに、それまで待てというておきましたわいの。」

とおの〳〵氣の長いものばかり、悠々と見物してゐると、かの職人の男、

「こりや、やい、まちつとこつちやへ寄りくされ。日向がなうなつて寒なつたさかい。」

魚屋「おゝ、寄つたがどうすりや。」

職人「おのれ、今おれが事を阿房とぬかしをつたが、何でおれが阿房ぢやぞい。」

魚屋「阿房ぢやさかい阿房ぢやわい。」

職人「何ぬかしくさる。さういふわれが阿房ぢやわい。」

魚屋「いや、こちや阿房ぢやない。かしこぢやわい。」

職人「われがかしこなりや、おれも賢いわい。」

魚屋「おゝ、われも賢いか。そしたらこの喧嘩やめにせうわい。」

職人「さあ、ひよつと互にせりあうて着物でも引ささいたら損ぢやさかい、やめにしてこまさうかい。」

魚屋「えらう遲なつた。もういんでこまそ。」

職人「おれは、われがいにくさる道ぢやほどに、つれだつていんでくりよわい。今日はえい天氣ぢやあつたな。」

魚屋「暖うてえいわいやい。」と互に挨拶して、この二人連れだちて歸る。見物もこそ〳〵と、ちり〴〵に皆歸りければ、彌次郎・北八腹をかゝへて、

彌「はゝゝゝ、なるほど上方者は氣が長い。あんならすのろい喧嘩が、どこにあるもんだ。」

北「あの中で、損徳を考へてやめにしたから、大笑だ。」

（東海道中膝栗毛）

三月七日
後醍醐天皇元弘二年（一九九三）

主上
後醍醐天皇

九　隱岐御遷幸

明くれば三月七日、千葉介貞胤・小山五郎左衞門・佐々木佐渡判官入道道譽五百餘騎にて、路次を警固仕つて主上を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とては、一條頭大夫行房・六條少將忠顯、御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外はみな甲冑を鎧ひ、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打圍み奉りて七條を西へ、東洞院を下へ御車を軋れば、京中、貴賤男女小路に立ち竝びて、正しき一天の主を、下として流し奉る事のあさましさよ。武家の運命今に盡きなんと、憚る所なくいふ聲巷に滿ちて、只赤子の母を慕ふ如く泣き悲しみければ、聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に、皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏し拜み、御輿を舁据ゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎭護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ廻らさるらんとたのもしくこそ思召しけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、

介錯
かしづき

東洞院
烏丸の東の通り

櫻井
攝津國三島郡島本村山崎驛の近く

八幡
男山八幡宮

應化
佛の時に應じ本身を異體に變化して出現すること

湊川
今神戸市の内

福原
これも同じ

印南野
播磨國加古郡の野

明石の浦
ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ（讀人不知古今集）

杉坂
美作國英田郡

久米の佐羅山
美作國久米南條郡

福原の京を御覽ぜられて、平相國清盛が四海を掌に握つて、平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば幾程もなく亡びしも偏に上を犯さんとせし驕の未だ果さずして、天の爲に罰せられしぞかしと思召し慰む端となりにけり。印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過ぎさせ給へば、昔源氏の大將の、此の浦に流され、三年の秋を送りしに、波只こゝもとに立ちし心地して、涙落つとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりにけりと、旅寢の秋を悲しみしも、理なりと思召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路潟、寄せ來る浪も高砂の、尾上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら〳〵に、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、遙かに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、「是は伯耆の大山と申す山にて候。」と申

雞唱
雞聲茅店月、人跡板橋霜
見尾
三穗

志士仁人
孔子の語
論語にある
衛懿公が
衛懿公之時、有下臣曰二弘演一者上

しければ、暫く御輿を停められ、內證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は雞唱に茅店の月を抹過し、或時は馬蹄に板橋の霜を踏破して行路に日を窮めければ、都を御出あつて、十三日と申すに、出雲の見尾の湊に着かせ給ふ。爰にて御船を艤して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。

其の比備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、御方に參じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠木も自害したりと聞えしかば、力を失つても共を集めて評定しけるは、「志士仁人無二求生以害一仁、有二殺身以成一仁。」といへり。されば昔衛の懿公が、北狄の爲に殺されてありしを見て、其の臣に弘演といひし者是を見るに忍びず、自ら腹を搔切

受レ命而使。未レ反而狄人攻レ衞…攻二懿公於滎澤一殺レ之、盡食二其肉一、獨舍二其肝一。弘演至二報使於肝一、辟畢呼レ天而號。哀止曰若レ臣者獨死可耳。於レ是遂自刳二出腹實一、内二懿公之肝一乃死。（韓詩外傳）

見レ義不レ爲　孔子の語　論語にある

船坂山　高さ五六四尺

つて懿公が肝を己が胸の中に收めて、君の恩を死後に報いて失せたりき。『見義不爲無勇』いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉つて大軍を起し、縱令尸を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん。」と申しければ、心ある一族ども皆此の議に同ず。「さらば路次の難所に相待つて其の隙を窺ふべし。」とて、備前と播磨との境なる船坂山の嶺に隱れ伏し、今や〳〵とぞ待ちたりける。

今宿　播磨國飾磨郡高岡町、姫路市の西

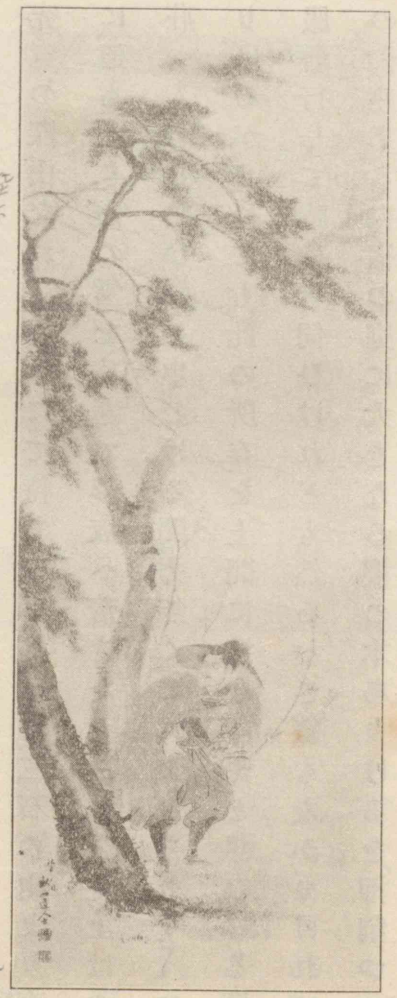
三石　備前國和氣郡

臨幸餘りに遲かりければ、人を走らかしてこれを見るに、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん。」とて、三石の山より直違に、道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、「主上はや院莊へ入らせ給ひぬ。」と申しける間、力無く、これよりちり〳〵になりけるが、せめても此の所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して時分を伺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に大きなる櫻の木ありけるを押削つて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫レ空二勾踐一、時非レ無二范蠡一。

御警固の武士ども朝に是を見つけて、「何事を如何なる者が書き

たるやらん。」とて、讀みかねて卽ち上聞に達してけり。主上は軈て詩の心を御悟り有つて、龍顏殊に御快く笑ませ給へども、武士は敢て其の來歷を知らず、思ひ咎むることも無かりけり。



兒島高德（奥谷秋石筆）

さる程に主上は出雲の三尾湊に十餘日御逗留あつて、順風になりにければ、船人纜を解いて御艤して、兵船三百餘艘前後左右に漕ぎ並べて萬里の雲にさかのぼる。時に滄海沈々として日西

北の浪に沒し、雲山迢々として月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽かなり。暮るれば蘆岸の煙に船を繫ぎ、明くれば松江の風に帆を揚げ、浪路に日數を重ぬれば、都を御出あつて後二十六日と申すに御船隱岐國に着きにけり。佐々木隱岐判官清高國府島といふ處に黑木の御所を作つて皇居とす。玉扆に咫尺して召仕はれける人とては、六條少將忠顯・頭大夫行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引替へて、憂き節茂き竹椽淚隙なき松の墻、一夜を隔つる程も堪へ忍ぶべき御心地ならず。鷄人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり御枕の上に近ければ、夜の大殿に入らせ給ひても露まどろませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども、曉ごとの御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば

都を御出
元弘二年三月七日

國府島
國府のある島の意か
隱岐の島後なる國分寺を行在所とせられたか

雞人曉を唱へし聲
雞人は宮中にて曉を報ずる官人
朗詠集に都良香「雞人曉唱。聲驚二明王之眠。」

萩の戸
清涼殿に在る

百官罪なくして愁の涙を配所の月に濺ぎ、一人位を易へて宸襟を他郷の風に惱まし給ふらん。天地開闢よりこのかたかゝる不思議を聞かず。されば天に懸る月日も誰が爲に明かなる事を恥ぢざらん。心なき木も之を悲しみて花さく事を忘れつべし。（太平記）

一〇　鷲

土井晩翠

紫にほふ横雲の
露や染めけん花すみれ
花に戯るゝ蜂蝶の
愛か恨かうつし世の

土井晩翠
名は林吉
英文學者
詩人
第二高等學校教授
明治四年仙臺生

はかなき春をよそにして、
大空のぼる鷲一羽、
嵐は寒し、道さびし。

春の姿はたへなれど、
花の薫はにほへれど、
その春よりもうるはしく、
その春よりもがんばしき
雲井のをちをめざしつゝ
大空高く鷲一羽、
嵐はきびし、道かたし。

背には無限の天を負ひ、
綠雲はねてつんざきて、
飛行くはてはいづくぞや、
望のあした持ちきたる
高きかをりのあとゝめて、
大空めぐる鷲一羽、
嵐はつらし道すごし。

カウカサス　黑海とカスピ海との間にある山脈　Caucasus

嗚呼カウカサス峰高く、
千里の叢雲むらだちて、
下界のひゞきやむところ、
天上の火を奪ひ來し

彼のたぐひか青雲の
大空翔る鷲一羽、
嵐ははげし、道遠し。（天地有情）

高須芳次郎　號は梅溪　文學者　明治十三年大阪生

ロマンチック　傳奇的　情熱的　Romantic

二　新しい詩の生誕

高須芳次郎

新しい詩の生れる時代は美しい夢を追ふ時である。理想の青い花を求むる時である。憧憬の眼を輝かして聲朗かに高く歌ふ時である。日清戰後、國民的自覺の精神が强められると共に、社會は活氣づき、人氣は湧き立ち、文壇は著しく勃興の機運に向いた。こゝに明治文學の第一躍進時代が來たのである。創作に、評論に、新人が活躍した。しかも全體を通じてロマンチック

の色彩が強く詩歌の勃興を促した。新體詩・俳句・短歌などの上に華々しい革新運動が起つた。そしてそれが或程度まで成功の美果を收めたのである。新體詩の革新と勃興とは特に著しいものがあつた。それは機運の成熟にもよつたが、一つは島崎藤村・土井晚翠等を中心に薄田泣菫・蒲原有明其の他の有力な詩人が輩出して詩壇に盡した爲であつた。

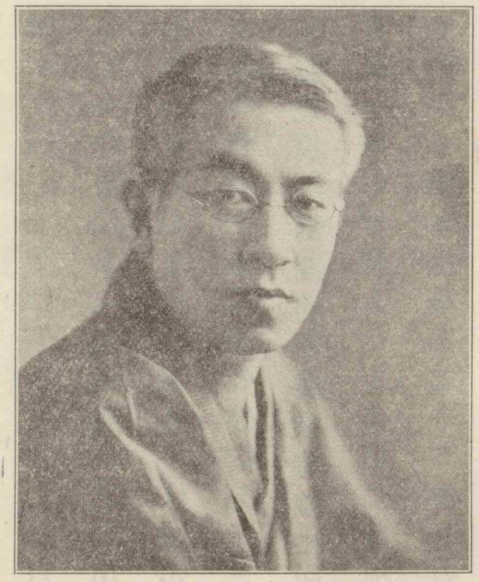
明治三十年八月に出た島崎藤村の「若菜集」は詩界の混沌を破つて、若き日本の詩の向ふところを知らしめたエポック・メイキングの一產物であつた。內容・詩形・詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は「若菜集」によつて濃度を加へて來た。

藤村が「若菜集」を出して新體詩人としての顯著な成功を得たわ

蒲原有明　名は隼雄　詩人　明治九年東京生

エポックメイキング　Epock-making　新時代を劃するやうな劃期的の

けは、(一)專念ヨーロッパの詩に讀耽つて、スウィンバーン・ロセッチ等の影響を受けたこと、(二)詩形・用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと、(三)藝術的氣稟が豐かで新時代の感情を代表的に歌ひ出したこと、(四)敍事・抒情兩面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學・支那文學の素養が相當にあつたことなどによるであらう。藤村の詩には勿論彼の個性の色彩・匂はあるが、詩人として奔放な情想を披瀝したロセッチや、「バイロンの再生」と稱せられたスウィンバーンの官能的な抒情



島崎藤村

スウィンバーン　英國の詩人　Swinburne (1837—909)

ロセッチ　英國の詩人で畫家　Rossetti (1828—1882)

バイロン　十九世紀初頭英國のロマンチシズムの代表的詩人　Byron (1788—1824)

の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身、有り餘る程の情熱を抱いて孤獨の境、漂泊の旅などに自然の美を思ひ、憧憬思慕の感に身を浸したのである。それらの體驗を透して彼は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく「若菜集」に歌ひ出したのである。而も彼には藝術的に細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、其の詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして「若菜集」が劃期的な痕を詩壇に印したのは當然のことだ。

センチメタル Sentimental 感傷的

勿論、今日から見ると「若菜集」には、センチメンタルな傾向が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に對して高踏的、逃避的な點がある。が、さうした缺陷があつても、「若菜集」の美點は決して傷つけられない。それはそこに永遠の美しい夢があるからだ、消しても消えさらぬ情熱の噴泉があるからだ。「若菜集」中の秀拔な詩はどれであるかといふことについては各自の好があらう。私は「深林の逍遙」「四つの袖」「秋風の歌」などを推したい。

涼しいかなや、西風の
まづ秋の葉を吹けるとき、
寂しいかなや、秋風の
かのもみぢ葉にきたる時、

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散ごとく、
吹き漂はす秋風に、

飄り行く木の葉かな。

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく、
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり、力あり。（秋風の歌）

「若菜集」で成功した藤村は、向上の一路を歩むことを忘れなかつた。其の翌年初夏には「一葉舟」を出し、冬には「夏草」を出して、彼の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には、彼の情熱に一味の沈靜を加へたあとが見える。「夏草」には藤村がロマンスの世界から現實の世界へ移つて行かうとした心持が見える。此の傾向は三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化されたことがわ

夢の世界
若菜集
一葉集
夏草
落梅集
現実の世界
小説
詩
新体詩

ロマンス
Romance
傳奇小説

かる。センチメンタリズムの殼を破ることは、可なりに困難であつたが、藤村は力めてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。

土井晩翠

情熱の詩人藤村に對して、冥想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的、一は考へるよりも先づ鋭く感じ、一は感ずるよりも先づ深く考へる。前者は優雅清新の致を具し、後者は雄健豪放の趣を備へて居る。そして其の何れもロ

マンチックであつた。

晩翠の詩的成功の原因は、(一)當時彼の如き冥想派の詩人が殆ど居なかつたこと、(二)詩的表現の明快であつたこと、(三)男性的風格に富んで而も粗放蕪雜に流れなかつたこと等を擧げることが出來る。彼の最初の詩集は、三十二年に出した「天地有情」である。そこには、主觀的に人生に對して現實の悲痛・無情を嘆き、一個理想の天地に憧憬を寄せた詩人の胸懷が明らかに洩らされて居る。其の詩思の上にまつはつて居るのは燃ゆるやうな青春の情熱ではなくて、理智に根ざした哲理的な思想の流である。「暮鐘」は殊に其のうちで優れた詩篇である。

祇園精舎の檜朽ちて
葷酒の香のみ高くとも、

祇園精舎　釋迦が說法をした中印度の寺

セント、ソフィヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも、
聞けや、夕の鐘のうち、
靈鷲・橄欖いにしへの
高き、尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ、
わが驂鸞の夢さめて、
鳳樓いつか跡もなく、
うつゝは脆き春の世や。
岑上の霞たちきりて、
縫へる仙女の綾ごろも

セントソフィヤ　St. Sophia　羅馬帝ユスチニアヌスがコンスタンチノポリスに立てた古い寺

靈鷲　釋迦が說法をした印度の山

橄欖　耶蘇が傳道したユダヤの山

袖に嵐はつらくとも、
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲、

その一音はこゝにあり。

晩翠は「天地有情」の次に、三十四年になつて「曉鐘」を出した。それには、以前よりも現實味が加つて、技巧が進んで居た。また北清事變を主題として「黑龍江上の悲劇」などを歌つた。が、其の詩想の上で何等の向上を見せなかつた。詩的生命の流動が遲緩になつて居た。蓋し彼は藤村のやうに、自己の進路について反省し凝思しなかつたために、早く行詰つたのである。

藤村・晩翠のほかに、稍〻後から出た青年詩人の雙璧は薄田泣菫・蒲原有明である。泣菫は大體に於て藤村と同じ行き方をした。

シェレイ　Shelley (1792—1822)　英國の詩人

キーツ　Keats (1795—1821)　英國の詩人

最初はロマンチックの情想に浸つて居た。ところが二三年の後には一轉して、現實に親しみ、美しい夢よりも當面の現實に興味を見出すやうになつた。それからが藤村の歩いた道によく似て居ると同時に、恐らく泣菫には藤村から少なからぬ感化影響を受けた時期があつたらうと思はれる。

泣菫の最初の詩篇「暮笛集」は三十二年十一月に出た。彼は中國の生れで、暖い情緒と溢るゝやうな才氣とを持つて居た。そしてイギリスの詩人シェレイ・キーツなどに私淑して「希臘古瓶賦」などを愛誦し「西風の歌」などに共鳴したものだと思はれる。さうした影響も亦彼の詩のうちに見出される。「暮笛集」の熱烈な情操と清新典雅の格調とは、最初から泣菫の詩的成功を著しくした。そして彼は三十四年に至つて「行く春」を出した。こゝに

も「暮笛集」時代の名殘を見ることが出來るが、一方に於て泣菫が農民・田園を始め、當面の時事問題などにも眼を注いで、彼の詩想をそれらに奔らせたものが往々見える。「石彫獅子の賦」は彼の佳什である。

裂けたる岩に爪かけて
雄々し、憤るかその姿、
鬣ながく背にまきて、
見れば湧きよる春の潮、
胸はゆたかに力男が
曳きしぼりたる弓のごと。
忿怒現ずる明王の

明王
佛法守護の神

ひろき肩より燃えあがる
焔か長き尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏
落ちて野薔薇の花ふむも、
巣くへる鳥は目ざめんや。

雄麗の趣に於て、泣菫の詩中、特異とすべきものだ。が、泣菫の闕點は、內容よりも詞藻の上により多く苦心して、ともすると美しい言葉に囚はれ易い傾があつたことだ。ある意味に於て、彼は詞藻美の詩人であつた、藝術至上主義者であつた。で、詩形などの上でもいろ〳〵の工夫を凝らした。八六調其の他に苦心を重ねて、不退轉の熱心を示した。けれども思想的・情意的に飛躍すべきことを彼は閑却して居た。

蒲原有明は、泣菫よりも稍〻深みのある詩人であつた。少なくとも思想的に彼は内在する生命を摑まうとする傾向を持つて居た。「草わかば」は彼の最初の詩集で、霊的神祕の境地に觸れようと力めた。そこから來る煩悩や悶えや寂しさを歌つたのが、三十六年五月に出た「獨絃哀歌」であつた。有明はロセッチに私淑した傾向があつたので、「獨絃哀歌」にはさうした影が印せられて居た。そして神祕の色と詩的情想とが一つに解けあつて有明の特色・個性がやうやく滲み出て居た。今「幻影」の中の二聯を引く。

今眼に入れるかげ見れば、
小甕は浪に燃え浮び、
甕のおもてはかゞやきて

スコット
Scott (1771—1832)
スコットランドの詩人小説家

白星　平木白星
鐵幹　與謝野寛
林外　前田林外

火もて描ける火の少女。
幻影はげにこゝに盡き、
小甕は浪に沈むとき、
わが身——焔の琴の絃、
火の小指もて誰か彈くべき。

以上の四詩人は、何れもロマンチズムの時代を代表する人たちである。そして此の期の一特質として見るべきは史詩の流行であつた。それは過去の歴史・人物などの美に對する強い憧憬が中心となつて、史詩を生んだのである。スコットが中世の騎士に憧憬れたのと同趣である。白星の「釋迦」鐵幹・林外・白星等の合作「源九郎義經」、岩野泡鳴の「豐太閤」、其の他多くの史詩が一時續出して、ロマンチックな夢をそゝつた。泣菫の如きは此の趨勢

につれて、神話の世界を歌つた。

（日本現代文學十二講）

三　北條泰時論

北畠親房

第八十八代、後嵯峨天皇御名は邦仁、土御門第七の御子にて、御母は贈皇太后源通子、贈左大臣通宗の御女なり。

御門、二十三歳の御年、四條天皇俄に晏駕し給ひて、皇胤もなく、連枝の御子もましまさゞりき。順德上皇未だ佐渡におはしましけるが、御子達もあまた都に留り給ひ、入道攝政道家の大臣、彼の御子の外家におはせしかば、この流を天位につけ奉らんと仰せ遣はしけれど、北條義時の子泰時、計らひ申して、この君をすゑ奉りぬ。誠に天命なり、正理なり。父の土御門天皇は、順德の御兄にて御心ばへもおだしく、孝行も深く聞え給ひしかば、天照大神の冥慮に代りて、計らひ申しけるもことわりなり。

大方泰時、心正しく政すなほにして、人をはぐくみ、物に奢らず、公家の御事を重くし、本所の煩を止めしかば、風の前に塵なくして、天の下鎮まりき。かくて年代を重ねしこと、ひとへに泰時が力とぞ申し傳ふめる。

北條泰時筆蹟

陪臣として久しく權を執ることは、和漢兩朝に先例なし。その主たりし頼朝すら、二世をば過ぎず。義時いかなる果報にか、からざる家業をはじめて、兵馬の權を執れりき。例稀なる事に

法式　貞永式目などを作つたこと

七代　泰時　經時　時頼　時宗　貞時　師時　高時

や。　されど、殊なる才徳は聞えず。　又大名の下に誇る心やありけん、中二年ばかりありて身まかりけり。　されども、彼の泰時相續し、徳政を先として、法式を堅くし、己が分を量るのみならず、親族竝にあらゆる武士をまでも誡めしかば、高官高位を望む者なかりき。　その政次第に衰へ、終に滅びぬるは、天命の終る姿なり。七代まで保てるこそ彼が餘薫なれば、憾むる所なしといひつべし。

凡そ保元・平治よりこの方の亂りがはしきに、頼朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば、日本國の人民いかゞなりなまし。　このいはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備の勝ちにけると思へるは誤なり。　所々に申せることなれど、天津日嗣は御讓に任せ、正統に復らせ給ふにとりて、用意あるべき

ことあり。　神は人を安くするを本誓とす。　天下の萬民は皆神の物なり。　君は尊くましませど、一人を樂しましめ、萬民を苦しむることは、天も許さず、神も幸せぬ謂れなれば、政の可否に隨ひて、御運の通塞あるべしとぞ覺ゆる。　まして人臣としては、君を尊び民を憐み、天に跼り地に蹐し、月日の照すを仰ぎても、心のきたなくして、光に當らざらんことをおぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして、惠に洩れんことを顧みるべし。　朝夕に、長田・狹田の稲の種をくふも皇恩なり。　晝夜、生井・榮井の水の流を飲むも神德なり。　これを思ひも入れず、有るに任せて欲を恣にし、私を先として公を忘るゝ心あらば、世に久しき理あらじ。　況んや、國柄を執る仁に當り、兵權を預る人として、正路を蹈まざらんにおきては、いかでか、その運を全くすべき。　泰時の昔を思ふに

は、よく誠ある所ありけんかし。子孫はさほどの心あらじなれど、堅くしける法のまゝに行ひければ、及ばずながら世をも重ねしにこそ、異朝の事は、亂逆にして紀律なきためし多ければ、例とするに足らず。我が國は神明の誓著くして、上下の分定まれり。しかも善惡の報明かに、因果の理空しからず。且は遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て、將來の鑒戒とせらるべきなり。抑この天皇、正路に復りて日嗣を承けたまひ、終に繼體の主として、この御末ならぬはましまさず。即位の後も御身を愼み給ひてにや、天下を治め給ふこと四年、太子幼くましゝかども御讓國あり、院中にて世を知らせ給ひき。御出家の後も變らず、二十六年ありしかば、白河・鳥羽よりこなたには、穩かにめでたかりし御代なりかし。五十三歳おはしましき。（神皇正統記）

頼山陽
頼久太郎襲
漢詩人
漢文家
安藝竹原の人
京都に住む
天保三年（一八三二）
歿
年五十三
本文は山陽が三十一歳で備後の菅茶山の塾にゐた時武術の師築山捧盈に贈つたもの

愚父
頼彌太郎惟寛
春水と號す
廣島藩の儒者
文化十三年（一八一七）
歿
年七十一

只今之身分
山陽三十歳頃濟の上藩を出で備後の菅茶山の塾で教授を助けてゐた

一三　舊師に懷を述ぶ

頼山陽

幸便に任せ一筆奉申上候。殘暑之節益〻御勇健被遊御座候哉、奉伺候。其以來は打絶不奉伺、背本意罷在候。誠に去臘は色々と御世話被遊被下、御別之刻も御親切之條々心肝に銘じ、今に目前に在るが如く、忘れ難く奉存候。其後も度々御噂ども被成下候趣愚父方より申越候。斯樣之者をも御見捨不被下候段、身に餘り難有奉存候。

扨此度内々心事申上度儀御座候而奉得貴意候。誠に父儀土民より御取立を蒙り、御國恩海山に御座候へば、其子たる者粉骨碎身仕候ても、御奉公可申筈に御座候處、只今之身分に相成致方無之、又假令再御使被遊被下候儀、萬一出來仕候

而も生來多病弱質之私少し之事にも耐兼候、故自身に甚だ無覺束奉存候。又御奉公不仕とも御報恩之致方無とは不可申、自身に是程之事は確に出來可申と存候事にて尺寸の報を心懸居申候事に御座候。經書講釋等も不得手の儀、得手と申而は史學文章に御座候。是にて少々にても御國の御用に相立候儀仕度、即ち籠居以來、日本外史と申す武家の記錄二十二卷著述成就仕居候へども、是は區々たる事にて引用の書ども不自由、私心に滿不申。愚父壯年之頃より本朝編年の史輯め申度志に御座候處、官事繁多にて十枚許致置候まゝにて相止申候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を繼ぎ、此業を成就仕、日本にて必用の大典は藝州の書物と人に爲呼申度念願に御座候。此儀三都に居申候而、書物を廣く取集め多聞の友を多く取不申而は出來不仕事に御座候。水戸日本史抔も江戸に史館御建被遊候は此譯に御座候。右史館抔申すは大造の儀に御座候故、私一分にて朋友門人抔相聚、仕上候儀は手覺御座候。少しも御上の御物入等懸け候儀は無之候。其上凡そ古より學者の業を成し候地は三都の外は無之候。如何なる達人にても田舍藝は用に立不申、闇齋・仁齋・徂來などの樣の業は都會ならでは出來不申。如此人々にても左樣に候へば、まして凡人は猶更の事にて、不肖の私に御座候へども、何卒右の場所へ出、名儒俊才に附合も候はゞ、學業成就、名を天下に揚げ、末代迄も藝州に何某と被呼候はゞ、螢火にて月光を增候譬にて、少しは御國の光とも成可申哉、生前之念願不過之奉存候。

菅先生
太中
茶山と號す
錦後の漢學者
文政十年（一八二七）
歿
年八十

然る處福山の公邊に而は、私を取放し不申樣と役人ども寄合彼是と談合仕、私に知行爲取、士儒に取立申度旨、內意菅先生より被申聞候。先生には私所存をば承知無之、不仕合の私故、是は宜しき事に有附候事故、承引可仕旨勸められ候。私對候に、是は案外の事を承り候。私奉公出來候身に候はば本國にて仕可申筈之儀に御座候。本國にても奉公不仕候上は、如何樣の御勸にても決して此儀可仕樣無御座旨答申候へば、それは小國故嫌候か、小國にても俸祿は隨分宜しき旨被申候故、私は義の一字を申候。義に協ひ不申儀に候はゞ、假令加賀薩摩より所望に預り候而も、見向も不仕了簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞をも盡し不申、他國にておめ〳〵と出仕候事、何の面目にて天下の人に對し可申哉

叔父
賴萬四郎惟柔
杏坪と號す
廣島藩の儒者
郡奉行
天保五年（一八三四）
歿
年七十九

と申切候。何分年少氣壯の內に一度大處へ出て、當世の才俊と被呼候者共と勝負を決し申度奉存候。家父叔父共は御承知の氣遣手に御座候故、兎角手放候事致兼、爰元へ差越候とも兄弟同樣の太中に預置候へば氣遣無之、其內に年も寄候へば、分別直り可申と心組可申候へども、私は若氣のみにては無之、前段の大志御座候故に御座候。此念願と申も人に少しも世話を懸け物入をさせ候事には無之、唯一言の許を受け候へば、私一分の才覺を以て、口を餬し候事は如何とも仕、家許より仕途等は一錢も煩し不申積に御座候。家父老年に相成候て、他處へ罷越候儀如何御座候へども、此處へ參居候も、京大阪に居候も五十步百步の違に候。此處に彼是と月日

を積候內、菅先生薫育の恩義は日々に重り候而難去相成可申、さりとても多年の念願、無に仕候も殘念至極、申計も無之、如何可仕哉と案じ煩ひ、當所へ參り候而より、下地病氣增長仕、食事等も大に減少候樣に御座候而、ぶら〳〵仕居申候。何卒尊公樣の御憐愍にて人一人御救被下本意を爲遂被下候事は相成申間敷哉。左樣にも相成候はゞ、英氣は百倍仕、多病の身も學問出精、天下之人に一人も追付せ不申了簡に御座候。身分落着、事業成就仕候上は家父も安心仕、少々は御國の御用に相立候事、出來仕可申候。何卒兩親存生中に此場を見せ申度奉存候。

斯樣の存念、廣島に居申候節より申上度奉存候へども、憚多く、時節も到來不仕と存、默止仕居候。骨肉の間は何日迄も小兒の樣に存じ、思切取計は出來不申、病人の療治は他人決斷仕候如く、此事は他人の所決に御座候。尊公樣ならでは此儀御決斷被下候人は無之候故、半年の餘もとつおいつ案じつめ候て此度不顧憚、生涯の浮沈と覺悟相究、申上候。乍恐能々御勘辨被下候而、尊公樣の御心附として被仰出可被下、私生涯の大望御遂させ被遊候はゞ、此御恩生々世々忘却仕まじく候。失言の罪眞平御高免可被下候。とても筆には盡不申、申留候。頓首敬白。（山陽外傳）

朝比奈知泉
評論家
文久三年（一八六三）
水戸生

一四　賴山陽

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に

チョーサー　Chaucer (1330頃—1400)　十四世紀の英國詩人

スペンサー　Edmund spencer (1552頃—1599)　十六世紀の英國の詩人

シェクスピア　Shakespeare (1564—1616)　十六七世紀の英國の詩人戲曲作家

ミルトン　Milton (1608—1674)　十七世紀の英國の詩人

在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脫して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は奬勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黃金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つら〳〵各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふものまた詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・シェクスピア・ミルトンの英文學に

コルネイユ　Corneille (1606—1684)　十七世紀の佛國の戲曲作家

モリエール　Moriere (1622—1673)　十七世紀の佛國の戲曲作家俳優

ラシーヌ　Racine (1639—1699)　十七世紀の佛國の詩人

レッシング　Lessing (1729—1781)　十八世紀の獨逸の戲曲作家批評家

ゲーテ　Goethe (1749—1832)　十八九世紀の獨逸の詩人戲曲作家評論家

於ける、コルネイユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、レッシング・ゲーテ・シルレルの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず、是を以てその勢力の及ぶところ限局せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふこと能はざりしを見る。

余はかの諸家の外に於てその才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤ったるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絕世・絕代

シルレル　Schiller (1753—1800)　十八九世紀の獨逸の詩人戲曲家歷史家

ダンテ　Dante (1265—1321)　十四世紀の伊太利の詩人

ペトラルカ　Petrarch (1301—1374)　十四世紀の伊太利の詩人

眞淵　賀茂眞淵　國學者歌人　明和六年(一七六九)歿　年七十三

景樹　香川景樹　歌人　天保十四年(一八四三)歿　年七十四

の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず。」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人とその才とを痛惜せずんばあらず。余は今日世人が猶その人を崇拜するを見て、聯か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜む所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽賴氏是なり。

「詩は別才なり。」といひ、「詩人は生る、成るにあらず。」といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。その童歲に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、その忠臣義士を懷ふに厚く、天下・國家を懷ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷かな

近松門左衛門　戲曲作家　享保九年(一七二四)歿　年七十二

竹田出雲掾　戲曲作家　寶曆六年(一七五六)歿　年六十六

老博士　柴野栗山　漢學者　文化五年(一八〇八)歿　年七十四

るに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さゞるところなく、春花秋月、遊展遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格・言行、誰かこれを詩にあらずといはん。

試にその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は誤謬のみ。その體裁は偏失のみ。然れどもその筆端は靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敍事或は精、或は疎、或は長、或は短、精にして長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫋々の餘韻を存す。爭戰を敍すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敍すれば讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敍論の如き、俯

仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむる者あり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の爭戰記を採りたるが如き、その事實に於ては博引旁搜と明證確說とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、專らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敍事詩たるのみ。

頼山陽

試にその論策・文章を看よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして、實用に施すべからざるもの比々として皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙は、おほくは小品の文字にあり。その形體は卽ち論策たり、文章たり、その本質は卽ち想像のみ、詩詞のみ。

去りてその詩を見よ。雄健なる者あり、典雅なる者あり、遒麗なる者あり、輕妙なる者あり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳に採りてこれを詩詞に寓したるものにあり。山陽亦自ら以て得意とし、「余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成眞詩。舍之而曰雁字鷺梭、

今樣
花よりあくるみ
吉野の春の曙見
渡せば唐土人も
高麗人も大和心
になりぬべし

李北地
名は夢陽
明の詩人

嚴海珊
清初の詩人

無爲也」とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戲に作れる今樣を讀み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、「この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり、もし馳驟縱横、奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地・嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず、潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒して之を詩賦に注がんか、儼然たる敍事詩を作りてわが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて專ら功力を詩に用ひざりしこと。余が山陽の專ら詩人とならざりしを惜む理由頗る多し。今且くこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に見れて背に益る。これ三なり。而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰、謂「我才子、未」悉」我者也、謂「我能刻苦者、眞知」我矣」」といふに至り、竊にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後彼の前兵兒謠並に蒙古來の原稿を觀るに及び、その苦心經營一句も苟にせざりし實迹を審にし、且その古賀穀堂を訪ひ、初その千言立成の敏才に驚きしが、數月を隔てゝ再び訪ひたるとき、その文稿の依然として改刪す

江木鰐水
名は戢
安藝の人
山陽の門人
明治十四年歿
年七十二

古賀穀堂
名は燕
佐賀藩の儒者
天保七年(一八三六)歿
年五十九

る所なかりしを見て、茲に興し易きのみの念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘憺、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜む第四の理由とするは、卽ち此の經營刻苦の氣力のみ。

眠驚船底響寒潮、天草洋中夜繫橈。太白一星光似月、波間照見巨魚跳。

泊天草洋　頼山陽未定稿（山陽先生眞蹟西遊詩）

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り章句・訓詁の末を爭ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、經

濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りてば、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つら〳〵山陽の才幹を窺ふに、政治・吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。卽ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はゞ、その成功何ぞ啻に今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の士氣を喚起して遂に

雲邪山邪吳邪越、水天髣髴青一髮。萬里泊舟天草洋、煙橫蓬窓日漸沒。瞥見大魚波間跳、太白當船明似月。

西遊舊作書爲山内彈正公子時己丑九月去遊時已十二年矣　襄

泊天草洋　頼山陽定稿（維新志士遺芳帖）

維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんが、何ぞ此の大功を奏するを得ん。」と。嗚呼、これ詩を知らざるものゝ言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙かに散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きはその文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小說と實錄との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては決して完全なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ初めより純然たる詩篇を作るの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、「實材たらしむべし、詞人たらしむべからず。」とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脫せずといへども、その史を學ばしめたるは大いに可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。（今世名家文鈔）

堀口大學
詩人
明治二十五年東京生

一五　夏の海

碧き空、
白き雲、
日は正午、
銀色に
日の照りかへす
松の林の

堀口大學

その上に、
やはらかき
紺青の海。

平滑な而も
しわのある、
やはらかな而も
金屬性に光る海。

平準なやうに見え、
而も判然と
かなた水平線の上で

空に連なる傾斜ある海。

見よ、
船も
白帆も
すべて其所にては
逆立ち、
逆落し、
眩惑のやうに
めまぐるしく
きら〳〵と輝き、
しかも

泣いてる妹の
心臓のやうに
やさしくやはらかい
紺青の海。

日は正午、
碧き空、
白き雲。

銀色に
日の照りかへす
松の林の

芥川龍之介
羅生門
或日の大内藏助
蜘蛛の糸
地獄変
侵文作
西方作
漢文の素養深し
現代長篇全集
芥川龍之介集
一度一度英文科
栄ちゃん・勇也実ぶと同級
昭和三年月二日かれきすとを量にのんで自殺

その上に、
一面に
すきまなく、
ダイヤモンドを
ちりばめた海、
きら〳〵と
目をさすやうに
輝きめぐる
紺青の海。（日本近代名詩集）

一六　或日の大石内藏助

芥川龍之介

一六　或日の大石内藏助

芥川龍之介
文學者
明治二十五年東京生

淺野内匠頭
播磨國赤穗城主
淺野長矩
元祿十四年(一七〇一)三月切腹仰付けられた

細川家
肥後國熊本藩主
細川綱利の上屋敷

大石内藏助
淺野家の家老
祿千五百石
元祿十五年(一七〇二)十二月十四日仇討翌年二月四日同志と切腹仰付けられた
年四十五

三國志
六十五卷
晉の陳壽撰
蜀魏吳三國時代の歷史

立てきつた障子にはうらゝかな日の光がさして、槎枒たる老木の梅の影が幾間かの明みを、右の端から左の端まで畫の如く鮮やかに領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘さつきから書見に餘念がない。書物は恐らく細川家の家臣の一人が貸してくれた三國志の中の一冊であらう。

九人一つ座敷にゐる中で、片岡源吾右衛門は、今し方厠へ立つた。早水藤左衛門は下の間へ話しに往つて未だにこゝへ歸らない。あとには吉田忠左衛門・原惣右衛門・間瀨久太夫・小野寺十内・堀部彌兵衛・間喜兵衛の六人が、障子にさしてゐる日影も忘れたやうに、或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる。その六人が六人とも五十歳以上の老人ばかり揃つてゐたせゐか、まだ

片岡源吾右衛門
高房
祿三百五十石
死んだ年三十七

早水藤左衛門
滿堯
祿百五十石
年四十

吉田忠右衛門
兼亮
祿二百石
年六十三

原惣右衛門
元辰
祿三百石
年五十六

間瀨久太夫
正明
祿三百石
年六十三

小野寺十内
和秀
祿百五十石
年六十一

堀部彌兵衛
金丸祿
三百石
年七十六

春の淺い座敷の中は、肌寒いばかりにもの靜かである。時たましはぶきの聲をさせるものがあつても、それは微かに漂つてゐる墨の匂を動かす程の音さへ立てない。

内藏助はふと眼を三國志からはなして遠い所を見るやうな眼をしながら、靜かに手を傍の火鉢の上にかざした。金網をかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものがこんがりと灰を照らしてゐる。その火氣を感じると、内藏助の心には安らかな滿足の情が今更のやうにあふれて來た。丁度去年の極月十五日に亡君の讐を復して泉岳寺へ引上げた時、彼自ら「あらたのし、思は晴るゝ、身は捨つる、うきよの月にかゝる雲なし。」と詠じた、その時の滿足が歸つて來たのである。

赤穗の城を退去して以來、二年に近い月日を、如何に彼は焦慮と

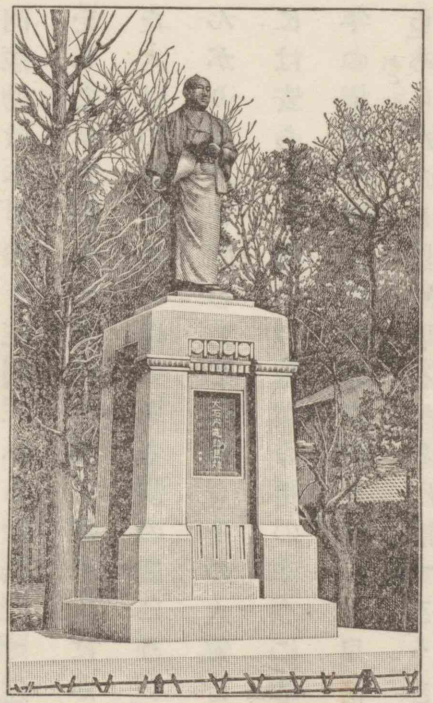
間喜兵衛
光延
祿百石
歳六十九

泉岳寺
東京芝區高輪町にある淺野家の菩提寺

山科
山城國宇治郡山科村に今も良雄の邸址がある

圓山
京都祇園の隣の地

畫策との中に費した事であらう。動もすればはやり勝ちな一黨の客氣を控制して、徐に機の熟すのを待つたゞけでも並大抵な骨折ではない。



大石内藏助銅像

しかも仇家の放つた細作は絶えず彼の身邊を窺つてゐる。彼は放埒を裝つてこれらの細作の眼を欺くと共に、併せて又その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科や圓山の謀議の昔を思ひ返せば、當時の苦衷が再び心の中に蘇つて來る。——しかし、もうすべては行く處へ行きついた。

もし、まだかたのつかないものがあるとすれば、それは一黨四十七人に對する公儀の御沙汰だけである。が、その御沙汰があるのも、何れ遠い事ではないのに違ひない。さうだ、すべては行く處へ行きついた。それも單に復讐の擧が成就したといふばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と殆ど完全に一致するやうな形式で成就した。彼は事業を完成した滿足を味はつたばかりでなく、道德を體現した滿足をも同時に味はふ事が出來たのである。しかもその滿足は復讐の目的から考へても、手段から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼としてこれ以上の滿足があり得ようか。

から思ひながら、內藏助は眉をのべて、これも書見に倦んだのか、

富森助右衛門
正因
祿二百石
年三十四

屠蘇
山椒防風桔梗白朮などを混合し年の始に酒に浸して飲むもの

書物を伏せた膝の上へ指で手習をしてゐた吉田忠左衛門に火鉢のこちらから聲をかけた。

「今日は餘程暖かいやうですな。」

「さやうでございます。かうして居りましても、どうかするとあまり暖かいので、睡氣がさしさうでなりません。」

内藏助は微笑した。この正月の元旦に富森助右衛門が三杯の屠蘇に醉つて、「今日も春恥しからぬ寢武士かな。」と吟じたその句がふと念頭に浮んだからである。句意も良雄が今感じてゐる滿足と變りはない。

「やはり本意を遂げたといふ氣のゆるみがあるのでございませう。」

「さやうさ。それもありませう。」

忠左衛門は手もとの煙管をとり上げてつゝましく一服の煙を味つた。煙は早春の午後をわづかにくゆらせながら、明るい靜かさの中にうす青く消えてしまふ。

「かう云ふのどかな日を送る事があらうとは、お互に思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我々はよく〳〵運のよいものと見えますな。」

二人は、滿足さうに眼で笑ひ合つた。――もしこの時、良雄の後の障子に影法師が一つ映らなかつたなら、さうしてその影法師が障子の引手へ手をかけると共に消えて、その代りに早水藤左衛門の逞しい姿が座敷の中へはひつて來なかつたなら、良雄は何

時までも快い春の日の暖かさを、その誇らかな滿足の情と共に味ふ事が出來たのであらう。が、現實は、血色の好い藤左衛門の兩頰に浮んでゐるゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはひつて來た。が、彼等は、勿論それには氣がつかない。

「大分下の間は、賑やかなやうですな。」

忠左衛門はかう云ひながら又煙草を一服吸ひつけた。

「今日の當番は傳右衛門殿ですから、それで餘計話がはずむのでせう。片岡なども今し方あちらへ參つてその儘坐りこんでしまひました。」

「道理こそ遲いと思ひましたよ。」

忠左衛門は、煙にむせて苦しさうに笑つた。すると、頻に筆を走らせてゐた小野寺十内が、何かと思つた氣色でちよいと顏をあ

傳右衛門　堀内傳右衛門細川家の家來義士を厚く接待した人

げたが、すぐ又眼を紙へ落してせつせとあとを書き始める。これは恐らく京都の妻女へ送る消息でも認めてゐたものであらう。――内藏助も眦の皺を深くして笑ひながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ、相變らずの無駄話ばかりでございます。――いや、さう云へば面白い話がございました。我々が吉良殿を討取つて以來、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさうでございます。」

「はゝあ、それは思ひもよりませんな。」

忠左衛門は、けゞんな顏をして、藤左衛門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故か非常に得意らしい。

「今も似よりの話を二つ三つ聞いて來ましたが、中でも可笑しかつたのは南八丁堀の湊町邊にあつた話です。何でも事の

南八丁堀　今は京橋區の内

起りは、あの界隈の米屋の亭主が風呂屋で隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかゝつたとか何とか云ふ、つまらない事からなのでせう。さうして、その揚句に米屋の亭主の方が、紺屋の職人に桶で散々撲られたのださうです。すると、米屋の丁稚が一人、それを遺恨に思つて、暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向ふの肩へ打ちこんだと云ふぢやありませんか。それも『主人の讐、思ひ知れ。』と云ひながら、やつたのださうです……。」

藤左衛門は手眞似をしながら笑ひ〳〵かう云つた。

「それは又亂暴至極ですな。」

「職人の方は、大怪我をしたやうです。それでも近所の評判は、その丁稚の方が好いと云ふのだから不思議でせう。その外

風馬牛
君處二北海一、寡人處二南海一、唯是風

まだ其の通町三丁目にも一つ、新麹町の二丁目にも一つ、それからもう一つは何處でしたかな。兎に角諸方にあるさうです。それが皆我々の眞似ださうだから、可笑しいぢやありませんか。」

藤左衛門と忠左衛門とは顏を見合せて笑つた。復讐の擧が江戸の人心に與へた影響を耳にするのは、どんな些事にしても快いに相違ない。唯一人内藏助だけは僅に額へ手を加へた儘つまらなさうな顏をして默つてゐる——藤左衛門の話は彼の心の滿足にかすかながら妙な曇を落させた。と云つても勿論彼が、彼のした行爲のあらゆる結果に責任を持つ氣でゐた譯ではない。彼等が復讐の擧を果して以來、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが當然である。し

馬牛不二相及一也。不レ虞君之涉二吾地一。（左傳）

かしそれにも關らず、彼の心からは今までの春の溫もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた。

事實を云へば、その時の彼は單に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊か驚いたゞけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衛門や忠左衛門と共に笑つてすませてゐる筈のこの事實が、其の時の滿足しきつた彼の心にはふと不快な種を蒔く事になつた。これは恐らく彼の滿足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行爲と其の結果のすべてとを肯定する程蟲の好い性質を帶びてゐたからであらう。勿論當時の彼の心にはから云ふ解剖的な考は少しもはひつて來なかつた。彼は唯春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく不愉快になつたゞけである。しかし內藏之助の笑はなかつたのは格別二人の注意を惹かなかつたらしい。いや、人の好い藤左衛門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるものと確信して疑はなかつたのであらう。それでなければ、彼は更に自身下の間へ赴いて、當日の當直だつた細川家の家來堀內傳右衛門をわざ〳〵こちらへつれて來などはしなかつたのに相違ない。處が、萬事にまめな彼は、忠左衛門を顧みて、「傳右衛門殿をよんで來ませう。」とか何とか云ふと、早速隔ての襖をあけて、氣輕く下の間へ出向いて行つた。さうして程なく見た所から無骨らしい傳右衛門とつれ立つて、相變らずの微笑を湛へながら得々として歸つて來た。

「いや、これは、とんだ御足勞を願つて恐縮でございますな。」

忠左衛門は、傳右衛門の姿を見ると、良雄に代つて微笑しながら

かう云つた。

傳右衛門の素朴で、眞率な性格は、お預けになつて以來、夙に彼と彼等との間を故舊のやうな溫情でつないでゐたからである。

「早水氏が是非こちらへ參れと云はれるので、御邪魔とは思ひながら、罷り出ました。」

傳右衛門は座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頰の筋肉を今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。これにつれて書物を讀んでゐたものも筆を動かしてゐたものも、皆それ〴〵挨拶をする。內藏助もやはり慇懃に會釋をした。唯その中で聊か滑稽の觀があつたのは、讀みかけた太平記を前に置いて眼鏡をかけたまゝ居眠りをしてゐた堀部彌兵衛が、眼をさますが早いか、慌てゝその眼鏡をはづして丁寧に頭を下げた樣子である。これには流石の間喜兵衛もよく〳〵可笑しかつたものと見えて、傍の衝立の方を向きながら苦しさうな顏をして笑をこらへてゐた。

「傳右衛門殿も老人はお嫌だと見えて、兎角こちらへお出になりませんな。」

內藏助は何時に似合はない滑稽な調子で、かう云つた。幾分か亂されはしたものゝ、まだ彼の胸底には、さつきの滿足の情が暖かく流れてゐたからであらう。

「いや、さう云ふ譯ではございませんが、何かとあちらの方々に引きとめられて、ついその儘話しこんでしまふのでございます。」

「今も承れば大分面白い話が出たさうでございますな。」

忠左衛門も傍から口を挾んだ。

「面白い話――と申しますと……」

「江戸中で仇討の眞似事が流行ると云ふあの話でございます。」

藤左衛門はかう云って、傳右衛門と内藏助とを、にこ〳〵しながら等分に見比べた。

「はあ、いや、あの話でございますか、人情と云ふものは實に妙なものでございます。御一同の忠義に感じると町人百姓までさう云ふ眞似がして見たくなるのでございませう。これでどの位じだらくな上下の風俗が改るかわかりません。やれ淨瑠璃の、やれ歌舞伎のと、見たくもないものばかり流行つてゐる時でございますから、丁度よろしうございます。」

會話の進行は又内藏助にとつて面白くない方向へ進むらしい。

奥野將監
赤穗藩士

そこで、彼はわざと重々しい調子で卑下の辭を述べながら、巧にその方向を轉換しようとした。

「手前たちの忠義をお褒め下さるのは有難いが、手前一人の料簡ではお恥しい方が先に立ちます。」

から云つて、一座を眺めながら、

「何故かと申しますと、赤穗一藩に人も多い中で、御覽の通りここに居りまするものは、皆小身者ばかりでございます。尤も最初は奥野將監などと申す番頭も何かと相談にのつたものでございますが、中ごろから料簡を變へ、遂に同盟を脱しましたのは心外と申すより外はございません。その外、進藤源四郎・河村傳兵衛・小山源五右衛門などは、原惣右衛門より上席でございますし、佐々木小左衛門なども吉田忠左衛門より身分

は低うございますが、皆一擧が近づくにつれて變心致しました。その中には手前の親族の者もございます。して見ればお恥しい氣のするのも無理はございますまい。」

一座の空氣は、内藏助のこの語と共に、今までの陽氣さをなくなして急に眞面眞な調子を帶びた。この意味で、會話は彼の意圖通り方向を轉換したと云つても差支へない。が、轉換した方向が果して内藏助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である。

彼の述懷を聞くと、まづ早水藤左衞門は兩手にこしらへてゐた拳骨を二三度膝の上でこすりながら、

「彼奴等は皆揃ひも揃つた人畜生ばかりですな。一人として武士の風上にも置けるやうな奴は居りません。」

「さやうさ。それも高田群兵衞などになると畜生より劣つてゐますて。」

忠左衞門は眉をあげて賛同を求めるやうに堀部彌兵衞を見た。慷慨家の彌兵衞はもとより默つてゐない。

「引上げの朝、彼奴に遇つた時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思ひました。何しろのめ〳〵と我々の前へ面をさらした上に、御本望を遂げられ、大慶の至などと云ふのですからな。」

「高田も高田ぢやが、小山田庄左衞門などもしやうのないたはけ者ぢや。」

間瀨久太夫が誰に云ふともなくかういふと、原惣右衞門や小野寺十内も、やはり口を齊しくして背盟の徒を罵りはじめた。寡默な間喜兵衞でさへ、口こそきかないが白髮頭をうなづかせて。

一同の意見に賛同の意を表した事は度々ある。

「何に致せ御一同のやうな忠臣と一つ御藩にさやうな輩が居らうとは考へられも致しませんな。さればこそ武士はもとより町人百姓まで、犬侍の祿盗人のと惡口を申してゐるやうでございます。岡林縫之助殿なども、昨年切腹こそ致された が、やはり親類、縁者が申し合せて、詰腹を斬らせたのだなどと云ふ風評がございました。又よしんばさうでないにしても、かやうな場合に立ち至つて見れば、その汚名も受けずに居られますまい。まして餘人は猶更の事でございます。これは仇討の眞似事を致す程、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねゞ御一同の御憤りもある事と申し、さやうな輩を斬つてすてるものが出ないとも限りませんな。」

傳右衛門は他人事とは思はないやうな樣子で、昂然とかう云ひ放つた。この分では誰よりも彼自身がその斬捨の任に當り兼ねない勢である。これに煽動された吉川・原・早水・堀部などは、皆一種の興奮を感じたやうに愈〻手ひどく亂臣賊子を罵倒しにかかつた。――が、その中に唯一人、大石内藏助だけは、兩手を膝の上にのせたまゝ愈〻つまらなさうな顏をしてだん〳〵口數をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐる。

彼は彼の轉換した方面へ會話が進行した結果、變心した故朋輩の代價で彼等の忠義が益〻褒めそやされてゐると云ふ新しい事實を發見した。さうして、それと共に、彼の胸底を吹いてゐた春風は、再び幾分の溫もりを減却した。勿論彼が背盟の徒に惜んだのは、單に會話の方向を轉じたかつた爲ばかりではない。彼

としては實際彼等の變心を遺憾とも不快とも思つてゐた。が、彼はそれらの不忠の侍も、憐みこそすれ憎いとは思つてゐない。人情の向背も世故の轉變も、つぶさに味つて來た彼の眼から見れば、彼等の變心の多くは自然すぎる程自然であつた。もし眞率と云ふ語が許されるとすれば、氣の毒な位な眞率であつた。從つて、彼は彼等に對しても始終寛容の態度を改めなかつた。まして、復讐の事の成つた今になつて見れば、彼等に與ふ可きものは唯憫笑が殘つてゐるだけである。それを世間は殺しても猶飽き足らないやうに思つてゐるらしい。何故我々を忠義の士とする爲には、彼等を人畜生としなければならないのであらう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。——江戸の町人に與へた妙な影響を、前に快からず思つた內藏助は、それと

は稍ちがつた意味で、今度は背盟の徒が蒙つた影響を、傳右衞門によつて代表された天下の公論の中に看取した。彼が苦い顏をしたのも決して偶然ではない。

しかし內藏助の不快はまだこの上に最後の仕上げを受ける運命を持つてゐた。

彼の無言でゐるのを、見た傳右衞門は、大方それを彼らしい謙讓な心もちの結果とでも推測したのであらう。愈彼の人柄に敬服した。その敬服さ加減を披瀝する爲に、この朴直な肥後侍は無理に話頭を一轉すると、忽ち內藏助の忠義に對する盛な歎賞の辭をならべはじめた。

何とやら晉の豫讓を指す

「過日もさる物識りから承りましたが、唐土の何とやら申す侍は、炭を呑んで啞になつてまでも主人の仇をつけ狙つたさう

てございますな。しかしそれは内藏助殿のやうに心にもない放埒をつくされるよりは、まだ〳〵苦しくない方ではございますまいか。」

傳右衛門はかう云ふ前置をして、それから内藏助が濫行を盡した一年前の逸聞を長々としやべり出した。高尾や愛宕の紅葉狩も、佯狂の彼にはどの位つらかつた事であらう。嵐山や祇園の花見の宴も、苦肉の計に耽つてゐる彼には苦しかつたのに相違ない。……

「承れば、その頃京都では、大石かるくて張拔石などと申す唄も、流行りました由を聞き及びました。それほどまでに天下を欺き了せるのは、よく〳〵の事でなければ出來ますまい。先頃天野彌左衛門樣が、沈勇だと御賞美になつたのも、至極道理な事でございます。」

「いやそれ程何も、大した事ではございません。」

内藏助は、不承々々に答へた。

武士の矢並つくろふ小手の上にあくれたばしる那須のしの原

大石内藏助筆蹟

その、人に傲らない態度が、傳右衛門にとつては物足りないと同時に、一層の奥床しさを感じさせたと見えて、今まで内藏助の方を向いてゐた彼は、永年京都勤番をつとめてゐた小野寺十内の方へ向きを換へると、益〻熱心に推服の意を洩し始めた。その子供らし

い熱心さが、一黨の中でも通人の名の高い十内には可笑しいと同時にかはいかつたのであらう。彼は素直に傳右衞門の意をむかへて、當時内藏助が仇家の細作を欺く爲に、さま〳〵とうき身をやつした話を事明細に話して聞かせた。

内藏助は、かう云ふ十内の話を、殆ど侮蔑されたやうな心もちで苦々しく聞いてゐた。と同時に又、昔の放埒の記憶を思ひ出すともなく思ひ出した。それは、彼にとつては、不思議な程色彩の鮮やかな記憶である。如何に彼は、この記憶の中に出沒するあらゆる放埒の生活を思ひ切つて受用した事であらう。さうして又如何に彼はその放埒の生活の中に復讐の擧を全然忘却した駘蕩たる瞬間を味つた事であらう。彼は己を欺いて、この事實を否定するには餘りに正直な人間であつた。勿論この事實

が不都合なものだなどと云ふ事も、人間性に明らかな彼にとつて夢想さへ出來ない所である。從つて彼の放埒のすべてを彼の忠義を盡す手段として激賞されるのは不快であると共にうしろめたい。

かう考へてゐる内藏助が、その所謂佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顏をしたのに不思議はない。彼は再度の打擊をうけて僅かに殘つてゐた胸間の春風が、見る〳〵中に吹き盡してしまつた事を意識した。あとに殘つてゐるのは一切の誤解に對する反感と、その誤解を豫想しなかつた彼自身の愚に對する反感とが、うすら寒く影をひろげてゐるばかりである。彼の復讐の擧も彼の同志も最後に又彼自身も、多分この儘、勝手な賞讃の聲と共に後代まで傳へられる事であらう。――かう云ふ不快な事實

と向ひあひながら、彼は火の氣のうすくなつた火鉢に手をかざすと、傳右衞門の眼をさけて、情無さゝうにため息をした。

＊　＊　＊　＊

それから何分かの後である。厠へ行くのにかこつけて座をはづして來た大石內藏助は、獨り椽側の柱によりかゝつて、寒梅の老木が古庭の苔と石との間に、的皪たる花をつけたのを眺めてゐた。日の色はもううすれ切つて植込みの竹のかげからは、早くも黃昏がひろがらうとするらしい。が、障子の中では、相變らず面白さうな話聲がつゞいてゐる。彼はそれを聞いてゐる中に、自らな一味の哀情が、徐に彼をつゝんで來るのを意識した。このかすかな梅の匂につれて、冴返る心の底へしみ透つて來る寂しさは、この言ひやうのない寂しさは、一體どこから來るのであらう。——內藏助は、青空に象嵌をしたやうな、堅く冷たい花を仰ぎながら、何時までもじつと彳んでゐた。（或日の大石內藏助）

一七　東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心を澄し、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを佗びつつぞ過しける。

逢坂の關
逢坂の關の清水にかげ見えて今や曳くらん望月の駒（紀貫之）

遊子
遊子猶行二於殘月一、函谷雞鳴。（和漢朗詠集）

蟬丸
宇多天皇の皇子敦實親王の雜色琵琶の名人

藁屋
世の中はとても
かくても過して
ん宮も藁屋もは
てしなければ
（蟬丸）

打出濱
今の大津市の内
松本石場あたり

藻誓沙彌
笠朝臣麻呂
養老頃の人

漕ぎゆく舟
世の中を何にた
とへんあさぼら
けこぎゆく舟の
あとの白波
（拾遺集）

いにしへの藁屋の床のあたりまで
心をとむるあふさかの關。

關山を過ぎぬれば、打出濱・粟津原など聞けども、未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより、
名のみ殘れる志賀の故郷。

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟のあとの白波。」誠にはかなく心細し。

野路
近江國栗太郎老
上村野路
勢多の東一里

青山の影
昆明春。昆明春。
春池岸古春流
新。影浸二南山一
青滉瀁。波沈二西
日一紅淵淪。
（白氏文集）

かつみ
眞菰

飛鳥川の淵瀬
∨世の中は何か常
なる飛鳥川昨日
の淵ぞ今日は瀬
になる（古今集）

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ
ながめし跡をまたぞながむる。

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。むかひの汀、綠深き松のむらだち、波の色も一つになりて、南山の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦・かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦・鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

武佐寺
近江國蒲生郡
武佐村長光寺

遺愛寺
日高睡足猶慵レ起、小閑重レ衾不レ怕レ寒。遺愛寺鐘敲レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看。
（白氏文集）

醒井
近江國坂田郡醒井村

行く人もとまらぬ里となりしより
荒れのみまさる野路の篠原。

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。行末遠き旅の空、思ひ續けられていといたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに、
かたしきわびぬ、とこの秋風。

音に聞きし醒井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水あまり凉しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて凉み合へり。

柏原
近江國坂田郡柏原村

不破の關屋
美濃國不破郡關ヶ原村にあつた

後京極攝政
藤原良經
建永元年（一二〇六）
薨
年三十八

かの西行が、
道のべに清水流るゝ柳かげ、
しばしとてこそ立ちどまりつれ。
と詠めるもかやうの處にや。
道のべの木かげの清水むすぶとて、
しばしすゞまぬ旅人ぞなき。

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川、霧の底にも音づれ、山風、松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風。」とよませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉を殘さんも中々に覺えて、

荒れにし後
人すまぬ不破の關屋の板びさしあれにし後はただ秋の風
（新古今集）

株瀨川
美濃國不破郡にある川今は川筋が變つた

照る月なみ
水のおもに照る月なみをかぞふればことよひぞ秋の最中なりける
（拾遺集）

二千里の外
三五夜中新月色二千里外故人心
（白氏文集）

此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀨川といふ處に泊りて、夜ふくる程に川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨に映ろひて、照る月浪も數見ゆばかりに澄渡れり。「二千里の外の故人の心」思ひやられて、旅の思いと

ど抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、

花洛を出でて三日、

株瀨川に宿して一宵。

しばく幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、

かつく遠情を前途一千里の雲に送る。

などある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき、秋のなかばの今宵しも、

かゝる旅寢の月を見んとは、（東關紀行）

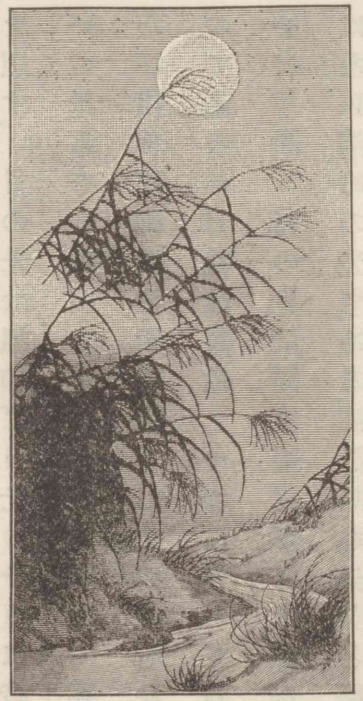
芳賀矢一
國文學者
東京帝國大學教授
國學院大學長
文學博士
慶應三年（一八六七）
福井藩生

一八　月雪花

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で日光のやうに峻烈ではない。日は仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して大小の有象・無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒が油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日

うちむかふ
荷田蒼生子の歌

の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の陰、寒地の氷雪の家、眺める人の心は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながら、浮ぶはちぢの思なりけり。」である。東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嘆嗟し、之を吟咏した詩歌は世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は云ふ、「月は地球の衞星で全く死んだ冷塊であ



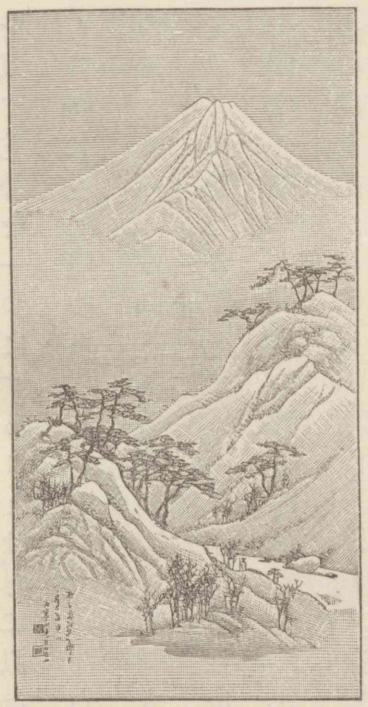
月　（瀧和亭筆）

花ならば
花ならば咲かぬ
梢もまじらまし
なべて雪ふるみ
吉野の山（仙覺）

三千世界
宋の劉師道の詩

る。」と。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも、一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや「花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて雪降るみ吉野の。」といふやうに眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで唯一條の川を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるので

ある。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺めはもとより美しいに相違ない、花の散つたのちの新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は決して我等の世界程樂しいものではないであらう。



雪　（瀧和亭筆）

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざまどれを見ても美しいのが、四季につれ、咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛しその淸淨

花をし見れば
年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし
（藤原良房）

山櫻
康資王母の歌

を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。

花（瀧和亭筆）

余は唯「花をし見れば物思もなし。」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは各その特長がある。いづれを前いづれを後といふことが出來ぬ。

山櫻、花の下風吹きにけり、

冬ながら
清原深養父の歌

笠は重し
謠曲葛城の句

アイスランド
Iceland

木のもとごとの雪のむらぎえ。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、
雲のあなたは春にやあるらん。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪、靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地の人は寸紅の、目を樂しませるものも持たない。又之に反して、全く

氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは古人の歷史がくはゝつて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまた
我をもゆるせ、秋の夜の月。

世々を經て
伊藤仁齋の歌

月は古來の歷史を照す鏡である。

年々歲々花相似、歲々年々人不同。

年々歲々
唐の劉廷芝の詩

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見てい

よ〳〵多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得るわれら祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を與ふるよ、如何に多くの追慕をわれらに催さしむるよ。（月雪花）

師範國文 第一部用 第五終

文部省檢定濟

大正十五年三月十七日　師範學校國語科教科書

大正十四年十月二十七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十日訂正再版印刷
大正十五年三月十三日訂正再版發行

定價
卷一・二　金四十三錢
卷三・四　金四十九錢
卷五・六　金三十八錢
卷七・八・九　金三十錢
卷十　金四十三錢

昭和四年度臨時定價
金七十一錢
金六十六錢
金六十五錢
金六十三錢
金七十一錢

著作兼發行者　吉田彌平　東京市小石川區高田老松町五十二番地

編輯者　上原才一郎　東京市神田區通神保町六番地

印刷者　東京市神田區通神保町六番地

發行所　光風館書店　東京市神田區通神保町六番地
（電話神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）

昭和五年度臨時定價　金六拾四錢

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

凸版印刷株式會社本所分工場印刷

師範國文第一部用卷五

學科簿
任之印
山口
広島大学図書
2000301852
庫
26
852